

# ららばい、通信

2019年

## 新春号



特集  
豊かさって



..... [目次] .....

■ 家族がいた時間	西館 好子
■ 冬のうた	
■ 連載 絵解き 風流子ども歳時記 正月の遊び 絵双六の巻	尾原 昭夫 …2
■ 特集 豊かさって 母への花束	志賀 秀孝 …8
■ 団 欒	…11
■ 飢餓の記憶 遠野物語遠景	日高見 猫十 …16
■ 連載 世界子守唄紀行 第21回「アイスランドの子守唄」	鶴野 祐介 …22
■ 特別インタビュー 長田暁二先生に聞きました	長田 暁二 …23
■ 連載 直島便り 豊かさって何だろう	山根 光恵 …24
■ 豊かさとは何だろう	西館 好子 …26
■ レポート 皆で考えよう やめよう虐待 とめよう虐待	…27
■ 幼児の災害	柳田 國男 …28
■ 過ぎたるはなお及ばざるがごとし	西館 好子 …30
■ 豊さについて	井上 麻矢 …31
■ やっちゃば食育出前講座	…32
■ おたより	…33
■ 活動報告	…34
■ 活動予定	…37
■ 寄付者名簿	



平成31年

ららばい通信新春号を

お届けいたします。



あけましておめでとうございます。

今年の五月には元号が変わります。昭和の子で生まれた私は「昭和」「平成」「つぎの？」の三代を生きたことになりま。とても長い年月を生きてしまったような気分がしていませんが、別に私自身の何かが変わるわけではないのです。そう思いつつ、何かが変わることを期待している自分がいます。それはおそらく肥大してきた「過ぎた時代」への回顧と懐かしさからくる「責任感」のような気もします。

私にも歴史があった、それはかけがえのない生きてきた証拠なので、ふっと消してしまったのかなあ、小さなことでもいい、どこかにそっと残せないだろうか、などと思えます。つまり自分が消えていくという自覚が大きく自分自身にのしかかってきたのです。

迷惑でしょうが、この頃は孫をつかまえて、昔のはなしをします。重複がないように、なるたけ面白く、簡潔に、正確に、を心がけていますが、まず名前や月日があいまいになってきたのはどうしようもありません。しかし、物語というのはまずは自分を話すことなのだと痛感しています。

ららばい通信も「号ごと」に年を取っていきます。長い間にはその記憶が歴史となるのでしょうか。そう思うと、改めてしっかりと残したいと気持ちを引き締めて丁寧にも編集していきたいと思っています。皆様の声も沢山聞かせてくださいませ。

日本子守唄協会 事務局

12月になって急に寒くなった。冬に

半袖でいられた11月から急転直下、身に染みる寒さだ。絶対に温暖化のせいだと息まいて、本来なら薬研堀のべつたら市もお西様も、木枯らしついて出かけたものだと、異常気象に腹立たしい気も手伝って自然現象に文句を言っていたが、いざ寒くなると「やっぱり寒さは嫌だ」となるのだから、我ながら恥ずかしい。

子どものこ

る冬の到来はとても楽しいものだった。家が下町のせい、とりわけ家が

家は祖母、母、

叔母と女系家族だったせいで、迎える新年にそれぞれの思いで立ち働く「勢い」にあふれていた。寒風が吹くと手をかじかませて沢庵や山東菜漬けが祖母によつてはじめられる。母は負けじと私たち娘たちの晴れ着や半纏つくりに精出すし、叔母はこまめに買い物に繰り出していた。私たち子どもはそんな忙しい大人たちのそばに張

## 家族がいた時間

日本子守唄協会 会長 西館好子

り付いているのがうれしかった。大人が夢中になって仕事をしているのは子どもにとはとても幸せな時間なのだ。こたつでミカンを食べ、ほら、残り布、など放り込まれると人形の着物を作ったり、味見してなどと台所から声がかかる。とつと飛んで行ったり、わけもなく忙しいと思ったりしていた。夜には決まって風が吹いた。家族

みんな下駄の音を鳴らしながら銭湯に行った。12月の季節はわけもなくワクワクそわそわ

して暮らしていた記憶がある。家族がいる時間はそんなに長くはない、今になると煩わしいと感じる時こそ家族の時間のような気がしている。



## 「そり」

作詞：長谷川良樹  
作曲：外国曲

リンリンリン リンリンリン  
すずのね  
とおくちかくきこえる

リンリンリン リンリンリン  
ばそりが  
ゆきのみちをはしるよ

## 「ねずみのもちひき」

作詞：不詳  
作曲：下総院一

もういいかい もういいよ  
こわいみけねこ よくねんね  
そらでろ やれでろ みんなでろ

もういいかい もういいよ  
うまいぞもちだ がったりこ  
そらひけ やれひけ みんなひけ

## 冬のうた

文部省唱歌

ゆきやこんこあられやこんこ  
ふつてはふつてはすんすんつもる  
やまものはらもわたぼうしかぶり  
かれきのこらすはながさく

ゆきやこんこあられやこんこ  
ふつてもふつてもまだぶりやまぬ  
いぬはよるこびにわかまわる  
ねこはこたつでまるくなる

## 「もちひき」

作詞：岩井春彦  
作曲：三戸吉樹

ペタンペタンおもちつき  
今朝はよからペタンペタン  
うしろはち巻きいせうよく  
とうさんつきますペタンコ

ペタンペタンおもちつき  
うちじゅう総出だペタンペタン  
白いエプロンたすきがけ  
かあさん手がえしペタンコ

ペタンペタンおもちつき  
ぼくも手伝つペタンペタン  
できたおもちをはこびます  
ペタンペタンペタンコ

## 「お正月」

作詞：不詳  
作曲：滝廉太郎

もういくつねるとお正月  
げんきにみんなたこあげて  
こまをまわしてあそびましよう  
はやくこいこいお正月

もういくつねるとお正月  
なかよくみんなまりついて  
おいばねついてあそびましよう  
はやくこいこいお正月





37〔紺屋のことなら染めても〕 38〔進上が張つても進上が〕〔泊〕 39〔御形は何と付けましよう〕  
 40〔肩裾に梅の折り枝〕中は御所のそりはし〔注〕「肩裾」は室町末期から多く小袖に用いられた、和服の中間部分を無地にし、肩と裾の部分だけに文様をつけたもの。  
 41〔その反り橋渡る者として〕渡らぬもオのとして 42〔ちよきにちよんぎら〕こう 入り舟千ぞう積みました〔注〕「ちよき」は緒牙舟で、細長い槽漕ぎの舟。  
 43〔お目出度やお盆〕たいひらめ 44〔上り〕 一ツあまれば「おめでた」へかえる 二ツあまれば「ちよきに」へかえる 三ツあまれば「そのそりはし」へかえる 四ツあまれば「かたすそ」へかえる 五ツあまれば「おかたは」へかえる〔注〕さいころの数がへ上りに合わないとき、余りの数により指示のところへ戻つて続ける。〕



25〔あとから屋形がおし〕かける 26〔船人留めろ とめたら〕わいらに五升やるな  
 27〔五升いらぬ三升いらぬ〕〔泊〕 28〔わいらにかまうと〕日がくわれる 29〔日は暮ウれる お月は出エる〕  
 30〔三吉弥吉今はやる いまはやる〕お江戸（戸）ではアやる〔注〕こでまた別種の手鞠歌へ。 31〔東京の戸長の中娘〕  
 32〔いろ白で桜色で〕 33〔江戸崎塩屋へ〕もらわれた 34〔その塩屋が伊達な塩屋で〕〔泊〕  
 35〔金蘭緞子に合紫を〕七かさね 36〔七重八重かさねて〕染めてくだされ紺屋どの

特

集

# 「豊かさって」

何もないけど 笑顔がある  
一緒に泣いてくれる 友達がいる  
こつんと拳固をくれる 父がいて  
台所の匂いのする 母がいる  
喧嘩ができる 兄弟と  
首をかshけて迎えてくれる ポチがいる

大きな空は僕のキャンパス  
僕は心の旅をして  
空に思い出の絵をかく  
ついでに僕は青空を 両手をふって  
駆け足で飛んでみる  
宇宙遊泳のように

僕がいつか大人になったら  
子供の頃の思い出を  
僕の子供に話したい  
父と母とのおもいでを  
笑いながら 泣きながら  
僕のつづった本の中に  
そっとたたんで仕舞いたい  
僕の心の大切な宝物として

今日が終われば 今日とは過去  
時間の魔女に 僕の時間を奪われないよう  
明日につなぐ夢をみよう  
明日を生きる物語を作ろう  
何もないけど 未知数の豊かさに包まれない  
大切な毎日という暮らしの中に  
豊かさは 目に見えない妖精となって  
飛んでいるに違いない

文  
谷まりも



特集

母への花束

府中市美術館 副館長補佐兼学芸係長 志賀 秀孝

私の子守唄のような思い出

私が小学校低学年頃だったか、なぜか母と二人で夜汽車に乗っていた。駅までタクシーの助手席にはミニカーがダッシュボードの上に無難に載っていた。運転手さんに手にとって遊んで良いかと聞いてから手に乗せて遊ばせてもらった。タクシーを降り、夜行列車に乗り、窓枠を道にみたてて掌を滑らせ遊んだ。ふと見ると私の指から、はみ出したミニカーが行き過ぎる街灯に光っていた。

「それ、どつ、しつ、たつ？」母は青ざめた表情で一言いった。どうしたっていわれても、そう、私は盗んだのだ。その時、盗みの罪への意識が、右の掌から全身に広がった。意外にも母は何も言わなかった。その代わり、車窓を見やる頬に涙をこぼしながら声なく泣いていた。私は身動きができなくなった。ただ母を泣かせてしまったのは、私の盗みの事実であることを恥じ、錆びた鉄釘を舂めたような「罪」を味わった。夜汽車の枕木を叩き続けるゴトン、ゴトンという音が、思い出の中で悲しく響いている。あの母の涙が、私には子守唄のように思えない。私の心はあの時の母の涙で出来たのかもしれない。

大人の子守唄

子守唄とは、「文字通り子供をあやしたり、寝かしつけたりするためにうたう歌だ。日本では、子守娘が自分の境遇を嘆いたり、望郷の思いを述べる内容のものが多く」（大辞泉）とされる。確かに寝かしつけるものかもしれないが、育てるものが、育つものに対しての願いとすることができまいか。子守唄は母から子へのメッセージである。これに対し、私はなんと子から母への返歌は「ど演歌」ではないかと思う。最近あまり聞かなくなつたが、森進一のヒット曲「おふくろさん」などである。お前もいつかは世の中の、傘になれ、愛をとらせ、と歌っている。子守唄の対をなすのは演歌だというのは強引であろう。子守唄では、はやく泣き止み、寝よと願う母。一方演歌は大人が人生にしがき自分がなぜ泣き叫んであるのか、母の期待になぜ添えないのかを母に訴えるように思えるのである。

『江戸の子守唄』

子守唄といえ、なんといっても江戸の子守唄だろう。妻が不在時に男の私が息子をなぐできていた様に思う。赤子は面倒を見てくれるいつもの子守がいなくて泣いても怒っても無駄で、悲しくそして「哀れ」なほどの寂しさを味わう。赤子も寂しさに耐えればご褒美（太鼓、笛）がもらえるよという淡い「喜び」。赤子は子守からも実母からも愛されているよという安心感。つまり喜怒哀楽という人として一番の根本感情を子守唄は教えているようにも思えるのである。いわゆる人生の教科書であり処世哲学書でもある。つまり現実社会は理不尽な大人の事情によって成り立っており（いつもの子守がいなくなる）、これにはひたすら耐えねばならない。そして忍耐の代償として報酬（太鼓、笛）がもらえるという経済を教える。不条理を忍耐でしのぐ処世哲学を子守唄は、まだ言葉も理解しない乳児期の脳内に深く繰り返し刷り込み、インプットする。教育の原点は、母が子に与える社会的な愛ではないだろうか。世の無常、つまり愛するものとは必ず離別する宿命とこれへの忍耐。しかし再会の可能性もわずかにあることへの期待。耐えれば報われるという因果応報の人生哲学は大切なことである。さらにこの唄には、哀調の音階が付されている。実際、子が眠りにつく上で最も効果的な音調が子守の背中で磨かれてきたであろうが、これは世の無常や情感を表す哀感の絶妙なる音階である。この子守唄は、歌詞と音調によって、理論と情感の両面から赤子の精神に訴えかけ、重要事項を教えている様に思えてならない。

子守唄のリアリズム

ところで、現代とはどんな時代だろうか。我々の社会は安全安心な社会であってほしいと思う。思うが、実際は安全なはずの世界は大量殺戮戦争あり、公害であり、原爆あり、放射能汚染でありと、殺されるといふより、数字を削除するように人命が失われ続けている。

日常的に電車で、例外なくほぼ全員が携帯電話に無言で集中している。覗き込んでみると多くは皆ゲームである。電気で光りをつくり無農薬工場をつくったサラダを食べ、寸暇を惜しんで充電した機械でゲームをし、そのゲームは無料で配信される機関銃打ち合い、殴り合い、戦艦撃沈シューティングゲーム。何時間も瞬時にミサイルボタンを押す先制攻撃型をくりかえせば、脳内の奥にある意志決定判断能力よりも、条件反射的に己が身を守るべく必殺技を繰り出し相手を倒すのに0.何秒も間をおかずボタンを押す人間が量産されていくだろう。テレビも、人を誹謗中傷し、イジメや、笑って人の頭叩き、身体をどつき、その人のプライドを傷つけても平然と周囲の笑いをとる。学校の教室でも同様であろう。それをおもしろ番組として連日連夜放送する。朝から晩まで食べ物番組とビール、化粧品宣伝で、テレビは何か重大なことを隠していないだろうか、と勘繰りたくもなる。乱痴騒ぎの世の中、いじめや、変質行為が多くなっても、ある意味偶然ではなく必然と思える。寝ないと刻んじやうぞ、早く寝なさいよとい

労働哀歌

私は代役の子守の方も気になり、子守唄が哀感こもる労働歌にも聞こえる。江戸の子守唄は、子守の側の心情の吐露で、子守労働の恨みも感じる。子守唄は背中の子のためにだけでなく、むしろ歌い手のためである。子守の里に帰りたい。里帰りを許してほしい。里に帰らしてくれたら、奉公に戻った時には坊やに土産も買います、もつと坊やを喜ばせませうからという、願いに満ちた一種の労働歌でもあるようにも思われる。なんととっても子守もなかなか重労働である。現代では生まれた赤ちゃんはみんなに愛され、慈しまれて育っていくものと考えられている。しかし近代以前もそうだったろうか。子守は若年者もできる一種の労働で職業である。幼く身体の小さな子守には、過酷な重労働である。労働なのだから、寝てくれない坊やを寝かせる魔法の歌をうたいたいくなるのも当然であろう。別の子守唄には「寝ない子は刻んじやうぞ」というものもある。この唄を歌うのは鬼でも悪魔でもなく、単なる労働哀歌である。

人生の最重要事項を教える唄

乳幼児教育の教材としてこの子守唄は実によ

う子守唄が残酷なのか、我々の社会の方が残忍なのか。子守唄は、もうちゃんと教えている。こんな世の中を耐えなくてはならないのだと。

### 子守唄のメロディーに感じる処世術

「ねなさいよ」は「魂よ静まりなさい」とも聞こえる。鎮魂歌だ。目をつむるのは、現実社会を肯定しているわけではなく、無視することである。私たちは自分の幸福を一日中願う。しかし幸福とは、孤独で無いこととも思えるのである。つまり不幸とは孤独と同義になる。

今時流行らないのが「暗い」、「寂しい」、「悲しい」、「ひとりぼっち」。しかし核家族、少子化、高齢化、孤独死における不幸の共通項目は「寂しさ」である。寂しさを味わうことなく過ごすことが幸福であると考えている人は多い。また我が子には寂しい思いをさせたくないというのが親の一番の願いである。しかし、どうしても親が大方は先に死んでゆく。これは避けられない。つまり寂しさは避けられない宿命である。家族はそれぞれ忙しい。家族と会話するより世界の人々と携帯で連絡を取り合っている。もうひとつ、一所で家族が何分黙って座っているだろう。昔は仕方なく、寒いので黙って、テレビもなく、囲炉裏を囲んだでいたであろう。しかし寄り添って一緒にいたのである。

### 寂しさを楽しむ

ふとアイディアがよぎる。「寂しさ」を楽しむ良いのではないか。

亡父は寒い福島の冬を何度も一人で耐えていた。男性独居老人(かつての我が父)が肉じゃがを作る。侘しい。可愛そう、親不孝で近寄りぬ子供達を怒りながら耐えたに違いない。結局自宅から出て施設に入ろうといつても「いやだ」の一点張りであった。不便でも、寒くても、寂しくてもこの家がいいのだと言いつつ張ったのだ。年金はそこそこあったはずなのに、たまに帰ると、大鍋に小さな庭でとれたという形の悪いナス、じゃがいもやなにかが形も色もなく、ご飯もまじって「おじや」だという。「お前も食べ」という。なんだかんだと断って、車で店に連れ出しはしたが、ひとりになるとまたあの親命の「おじや」なのだ。頑固親爺の子として、寂しさを楽しむ実験を家族に相談無く開始した。家族と口を聞かず、顔を合さず、部屋で過ごし部屋から出勤する。自分の食事、洗濯は自分で、最初は気楽なものだった。人生はこうでなくちゃ。だがその内、今まで考えたこともなかった家族について、考えている自分に気がついた。どこかで大事なものの存在に気付きはじめた。孤独を楽しむにはなぜか相当な苦痛を伴ったが、寂しさは紛らわせてはならないのではないか。「寂しさ」は、悲しみの源である。悲しみが大事だといった画家がいた。棟方志功である。「全ては悲しみであります。この悲しみというものを表せなければだめであります。」悲しみこそが芸術表現に最も大事だ

### 母なる自然

今、人間と人間関係が壊れかけているのではないか。その根本に自然観の変化がある。猛威を振る自然をまず認め、ある意味尊敬し、神のように尊崇することから、現代では自然を友とし対等とみなし、つまりは制御可能なものと思ひこんではいないだろうか。人間は自然を絶対

に手放せない。どんな嫌な奴でもつきあわなければならぬ。相手を取捨選択できる関係には無い現実がある。

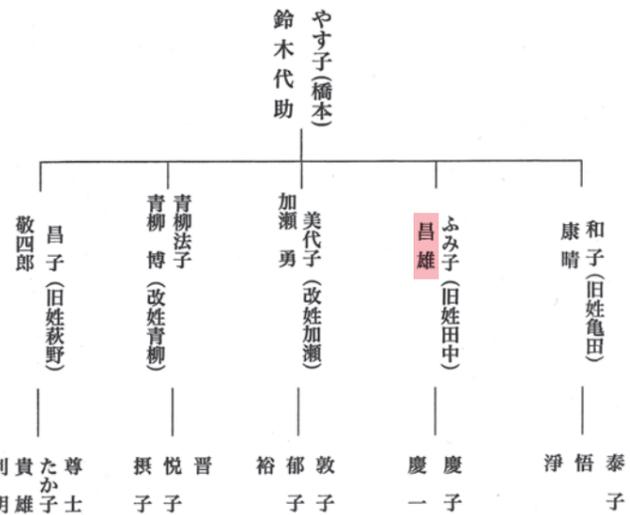
子守唄は、現実には目を閉じ、現実を耐えなさいといひ、寂しいから仲良くしようとは唄っていない。社会はろくなものではないかもしれない、自然も荒れるがこれを認めよう、じっと耐えようという。ひたすら互いが分かちがたい因果で居合わせ続けることに耐えるべきこと。こうした絶望の唄を子どもにインプットする。だからこそ、その後の人生に、わずかな幸福を見いだすことができるのではないだろうか。最初から祝福され、幸福の絶頂からスタートするならば人生は下ることしかできなくなってしまうではないか。

先日寂しい山に一人でキャンプした。闇夜の月は、眼にささり眠れぬほどまぶしく、心も照らした。マイナススタートの素晴らしい豊かさ、隠された応援歌を子守唄に勝手に感じている。

## 集 家族同人誌

# 馬鈴薯の芽の会より

No.1 一九六六年(昭和41年) No.9 一九七二年(昭和46年)から抜粋



### 【一生】

人の一生を四季に例えるならば、子供の春にあたるそうだ。

目につくもの、手にふれるもの凡て遊びの対象とし、悩みを持たず、疲れればすぐ寝てしまふ。何を着てもよく似合う。まさに子供は花咲き、鳥歌う春にちがいない。

それにひきかえ、晩年のみじめさ、体はおとろえ、医者世話になることも多くなり、楽しみもなくなる。おまけに行く手には恐ろしい死が待っている。

これこそ木枯らしの吹きすさぶ冬でなくて何であろう。

小島政二郎氏も言っているように、神様は人間に四季の配分を間違えたに違いない。自らの力でなんでも春にできる能力を持っている子供には冬でいいのではないだろうか、晩年こそは春に持つべきだった。

おふくろの晩年もたとえにもれず寒い冬の連続だったようだ。

喉頭ガンによる一年近い闘病生活、退院後、医師に無理だといわれた食道発声法を半年かかってものにしたものの、生き甲斐といえるものは、元氣な孫の姿を見る事と、百人一首を素養にした和歌を作ることだけだったかも知れない。

私は私なりに、おふくろに少しでも春を感じてもらおうと子供を連れて行って、なつかせてみたりした。

しかし、すべて無駄となってしまった。親の死を通してのみ、はじめて生命のもろさを実感した自分を情けなく思う。

おふくろの死後、いろいろ読んだ本の中で、大島研三医博の言葉が心に残っているので、ここに要旨を書き留めておく。

「人間が八十歳前後に死ぬことは、死の苦しみを意味する。家族に対する迷惑、家族の悲しみ、社会的な影響、そして本人自身、カンフル、酸素吸入、油汗を流しながら死線という死との

闘いをしなければならぬ。  
八十を過ぎて死ぬときは、朝、家族のものが起きてみたら息を引き取っていたなどと、天命を全うしたという理想的な死に方をする」  
おふくろの死の直前は呼吸の苦しさもなくなり、意識の混濁の中に息を引き取ったのはせめても  
の慰みである。

鈴木 昌雄

【おばあちゃんの思い出】

おばあちゃんの大好きな言葉の一つに「どの孫も一人一人みんな可愛いよ」と言ってもらいたのが、おばあちゃんの口癖の一つでもありました。家族顔合わせが何よりの楽しみの様子は言うまでもありません。  
孫たちに何かプレゼントするのが楽しみの一つだったようです。

ある時、ピヨピヨ鳴るサンダルがおばあちゃんの目に留まりました。  
靴屋に並んでいるサンダルを丁寧に二軒三軒と廻って自分の気に入ったサンダルを探し求めながら選択するのです。

良いものを捜し歩くのがおばあちゃんの性分でした。ピヨピヨ鳴るサンダルは二カ月も前から考えて決めていたものです。  
ピヨピヨ鳴るサンダルを祐君、慶一君、そして尊士と包装紙に包もなおして名前をいれていました。  
おばあちゃんから直接手渡された孫たちは、



【二人目に会う】  
父と娘の手をつなぎ行く初出勤  
菜の花やとりどりに咲く遅き春  
家族旅行や のどかなり

鈴木 ふみ子

【ミカン】  
ミカンはとっても美味しいな  
甘いようで すっぱくて  
なんという味が 考えていると  
いつの間にか いくつも食べている  
何こたべても ぜったいあきない ミカン  
ミカンよ 私は貴方が大好き

加瀬 敦子

【俳句】

母の発案により馬鈴薯の芽の会に積み立て預金をし一年に一度、旅行をすることになった。これは第一回の旅行であり、会としては初めての、旅に出て作品を作ることになった。

貨車通過 沈丁花揺れて海近し (敬四郎)  
春かすみ江見のお花の赤青黄 (勇)  
ゆきやなぎ 道ゆく人にたおられぬ (和子)  
春浅き 千倉の宿のつどいかな (康晴)  
紫雲英のはて いずれが泰子で敦子やら (敬四郎)

やつぱり歩いて外に出るのが面白くてたまらない矢先でしたので、おばあちゃんをよく観察していたのでしよう。

「おばあちゃんから買ってもらったの」  
頂いたサンダルを履いたまま寝てしまったり、持ったまま話さないで食事をしてしまったり、おばあちゃんの不断の草履と小さな青いサンダルを並べたりして、自分の玄関に置いたりしていました。

おばあちゃんは、尊士が玄関にいったん下したサンダルを始めてはく孫のために脱げにくい様にそのサンダルにゴムをつけてくれました。  
「ゴムは慣れたらはずしてもいいからね」と付け加えていました。

孫たちが部屋で走り回っていた時、何回か脱げて又はいたりしていたのを、おばあちゃんは見逃したりしてはいなかったのです。

ゴムをつけたサンダルは確かに便利で外で履いても決して脱げません。ママが何度もサンダルをかかなくてはかせる必要も省けてとてもいいアイデアだと思いました。

私が中学時代に見たこととはありましたが、おばあちゃんがいなかったら自分でそこまで気が付いてやってあげることが出来たかしら。

そばにおばあちゃんがついてくれたことが、私の良い習得の一つでもありました。おばあちゃんも『皆んな喜んでいたらよネ』と言っていました。

鈴木 泰子

荒磯の 波のしぶきも春の音 (ふみ子)  
早起きし 浜防風のさいしゆかな (勇)  
沈丁花匂い ぼくの入園もあとわずか (和子)

【各家庭別 作品集】

退院してからの母は、元気いっぱい。余暇を短歌づくりに精進している。  
その努力は異常なほどで、先日なども、珍しく眼鏡をかけている母の姿を見たが、読んでいるのは「啄木全集第三巻」であった。馬鈴薯の芽の会ではなくてはならないまどめ役である。  
雨ふれば また晴る日も あるものを  
なぜにつづくか このぬかるみを  
亡き友の あわき姿に ぼうぜんと  
ただぼうぜんと 夢にしたしむ  
ささやかな 幸せさえも つかみえず  
来世をちかい 細々と生きる

母

【康晴君の家(文京区湯島)】

妻の和子さん、子供が上から順に泰子(六歳)、悟(五つ)、浄(六カ月)康晴君のフィリピン旅行に始まり、泰子ちゃんが日舞のおさらいで「藤娘」を上手におどったり、赤ん坊の浄君の世話など、ママとしてとっても忙しい日々である。

初春や 孫六人の 家族会 (康晴)  
末の子を 得しよろこびや 福寿草 (和子)

【いたずらユーちゃん】

いたずら坊の裕ちゃん  
ハブラシどこだ オトイレだ  
おちゃわんどどこだ オフロバだ  
フデバコどこだ ゲンカンだ  
ほんとにこまるよ ユーちゃん  
おかげで 家じゅう てんでこま  
い だけどかわいいユーちゃん

加瀬 敦子

【三年生になって】

三年生になって 私は委員に  
えらばれた 男の子は金谷くん  
生まれて初めてのせんきょ  
むねがどきどきする  
かおがほっほしてくる。  
あたらしい友達 あたらしい先生  
あたらしい本  
なんだか 体がむずむずしてくる。

加瀬 敦子

【慶子の三つのお祝】

母親になれて うれしき初祝い  
母である 慶びあたえし七五三

鈴木 ふみ子



【昌雄君の家(千葉県松戸市)】

妻のふみ子さん、生後七カ月になる慶子ちゃん、それにアイヌ犬のサニー君、慶子ちゃんが、早くも初節句を迎え、家族の中心が慶子ちゃんに移ったせいか、サニー君がおひなさまをうらやましそうに見えています。

【勇君の家(台東区)】

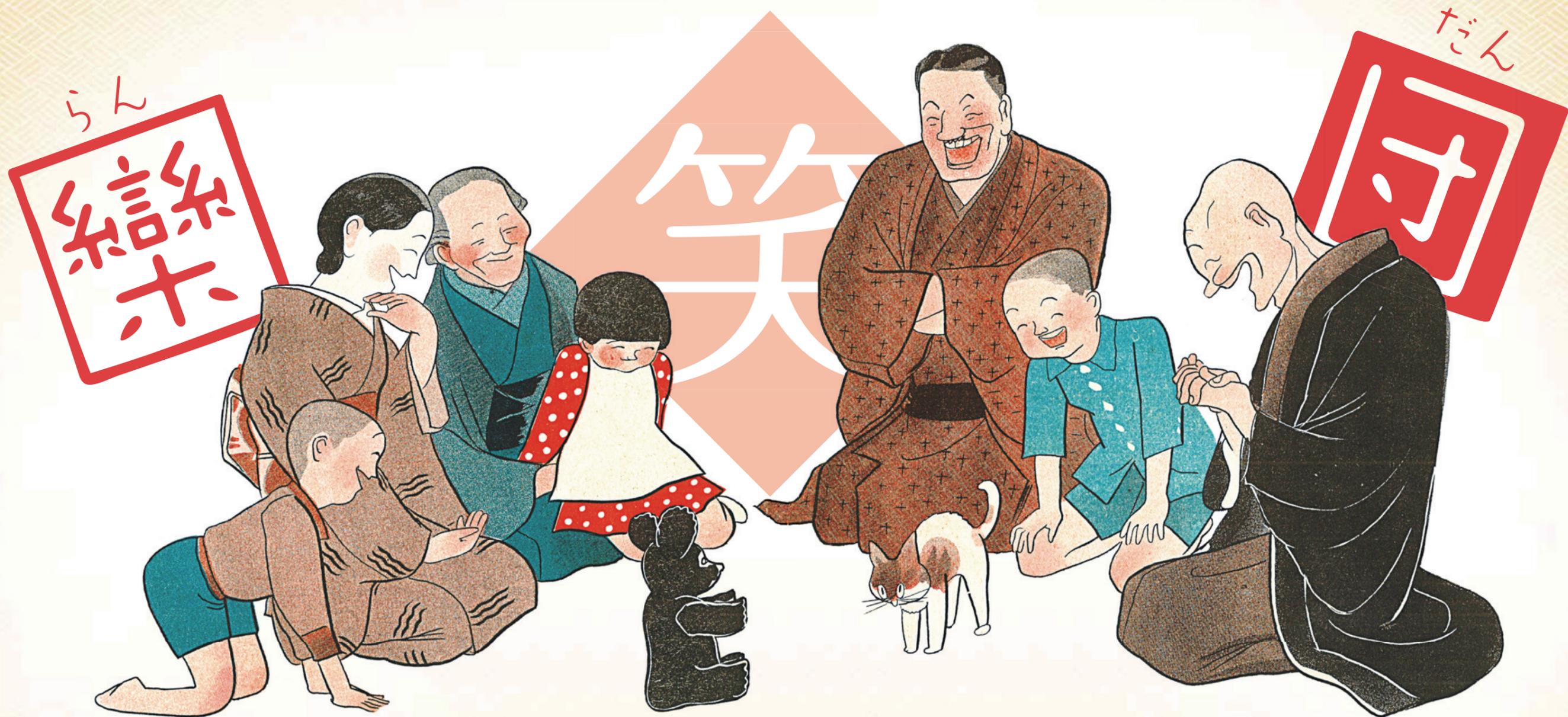
妻の美代子さん、子供が上から敦子(六つ)に郁子(五つ)敦子ちゃんのピアノの発表会や、幼稚園の卒業式と、ママもパパも忙しい。先日の馬鈴薯の芽の会の旅行会で照れ屋の郁子ちゃんがみんなの前で何度も何度も歌った唄がある。ユキノペンキヤサンハ、オーソラカラ、チラチーラ。

【博君の家(板橋区)】

妻の法子さん。四月二十日頃出産の予定です。生まれてくる子の前途をこに祝し、始めてパパ、ママになる心の準備はできたでしょうか!と推察します。

家族 親戚 つながり いいなあ。





## 家庭という言葉

家庭の庭という文字は、論語卷八の季氏篇第十六の終わりにある孔子と伯魚の父と子の間で交わされた話に基づいています。伯魚が庭を歩いていると父の孔子から呼び止められ、詩を学べ、禮を習へといわれたところから「家停」「庭訓」という熟語が用いられるようになりました。

庭はもっぱら「父」のことにかかり庭訓は父訓、父の教えということになります。この字は日本では鎌倉時代以後に盛んに用いられるようになりました。記録や、書に、歌句、手紙や普通に書く各文章にも、庭訓の教えとして流行しました。定家の明月記にも「昔聞庭訓」と記し、父俊成からの教訓を論じています。

定家の拾遺愚草という歌集にも「昔受庭訓」には「教えの庭の道の月影」という句があります。「庭の教え」「教えの庭」という句が勅撰集や新拾遺などに散見するのは、中国文明からきた学問によるところが大きいのですが、歌人定家の子孫たちは歌道の家筋の人々で伝統的な精神を含蓄した言葉として多く使われていたのかもしれませんが。

明治になって庭訓は「家庭」という言葉に置き換えられました。英語のホームがその新訳語で外国思想の輸入によって温かい気持ちを含むホームがあてはめられました。

「団欒」は月が丸いことを指しますが丸い月の形を示すようにみんなが車座になってなごむ姿をあらわします。家庭の団欒は仲がよい家族の集まりをいうことです。

遠野佐々木喜善賞受賞作品

## 飢餓の記憶 遠野物語遠景

日高見 猫十

掲載にあたり

日本の自給率をご存知でしょうか。わずか38%です。残りの62%は、外国に依存しています。でも私たちは毎日、大量の食べ残しを作り、さらに期限切れの食品を廃棄しています。これでいいのでしょうか？ 世界では、飢餓に悩まされている人口が、いまでも9億人以上います。飢餓が原因で死ぬ子供たちが、年間400万人もいますが、大きなニュースにはなりません。なぜでしょうか？ 日本でも飢えに悩まされた時代がありました。「飢餓の記憶」を忘れてはならない、と思います。

辻村博夫(本名)

### ●天明三卯年

ずっと、昔のことだ。十代のおわりころ、わたしはひとつの詩に出会った。あるいは、ひとつの「死」に出会った。その詩を書いたのは、藤井逸郎という人で、初めてその名を聞く人だった。どうやら、岩手の詩人らしい、ということしか判らなかつた。

それは、母親がおさない娘を殺す、詩だった。しかも、母親が、石で娘のあたまを叩き潰して殺し、その死骸を川に流してしまふ、という内容だった。

それから数年後。卒業論文のテーマに「民話」を選んだわたしは、いろいろな昔話集や説話集を読むうちに、あることに気がついた。民話のもつ、一見明るくアナーキーで、そぼくで幸せに満ちた世界は、そこにただシンプルに明るく幸福な世界があつた、からではないと。この明るさの裏には、とてつもない暗闇の世界がひそんでいるのではないかと、予感したのだ。民話が生まれた前近代の農村の歴史的背景をたどっていくと、それは決して、落語の世界のように、単純で明るいものではなかつたのだ。子ども向けに再話された毒を抜かれたおとぎ話や木下順二の「夕鶴」のような民話劇ではなく、佐々木喜善が編んだ『聴耳草紙』などの原民話を読んでいくと、「死」や「エロス」に満ちていて、「飢え」や「血」のおいがした。貧しい百姓たちの、生や金に執着する赤裸々でおぞましい欲望が見えた。そこでわたしは、昔話集や説話集とともに、江戸時代の史料をあさるようになった。そして、民話が生まれた前近代の時代の歴史的背景に、いくつもの飢饉の歴史が重なっていたことがわかつたのだ。

藤井逸郎の詩のタイトルになっていた「天明三卯年」というのは、江戸時代の後期の年号で、西暦でいうと一七八三年のことだった。十代將軍徳川家治の治世のころだ。そして、この年は、江戸時代でもっともひどい飢饉のひとつ、「天明の飢饉」がはじまる年だったのだ。その天明の飢饉の歴史資料をあさっているうちに、わたしは「動転愁記」という史料に出会った。天明のころ、遠野に住んでいた人の日記だという。そのなかに、藤井逸郎が詩にした事件が記録されているのを発見して、わたしは驚愕し、文字通り、動転した。

そのすさまじさ、おぞましさに、わたしは圧倒され、混乱した。どうして、母親が娘を殺すのか、それがわたしの理解を越えていた。何度も、その詩を読み返すことで、「飢え死に」「腹減つて泣く」というフレーズが、その子殺しの背景にあるキーワードになっている、ということもわかつてきた。そして、この惨劇が演じられたのが「早瀬川原」という場所だったことも、推測できた。

だが、どうして、七つのめぐい娘を母親が殺すのか……。その本当のところは、都会育ちのあまっちょろい若造だった私には、正直わからなかつたのだ。詩のタイトルは「天明三卯年」。こんな詩だ。

おまえそんなに痩せひからびて  
生きていつてみんな飢え死にするばかり。  
今夜はやろうか、  
あしたはやろうか、  
やっばり天にお返ししよう  
生まれたときのいとしさに  
七つの歳まで育てたに  
返しそびれていたのだと  
もつともらしく思案して  
つれ出してきた早瀬川原。  
おまえはほんとにめぐい娘つこだ。  
虱つこつてくれつから  
ここさ来て横になれ。  
ここにちようどいい石があつから  
これを枕にしてな。

へどつかどつかとどきがし、がさがさの手首わなほれ、こんなに虫の子が  
わなふるえ。〳

史料には、こうあつたのだ。

何処の女にて候や、早瀬川原へ七、八歳の娘を召連れ、石を枕にさせ初めは髪の子など取りくれ候ていに見え候ところ、手ごろの石を振り上げ力に任せて頭を一打ち付ければ、わつと泣き出し、以来は喰いたい喰いと言わぬ故ゆるせゆるせと詫びすれども、めつた打に頭を徹塵に打ひしぎ、息絶えもせぬに川へ押し入れ、その身は目ですりながら行方知らずになり候。

(「動転愁記」)

かつてわたしのころをゆさぶつた藤井逸郎の詩「天明三卯年」の描いた世界・事件と同じものではないか！「死屍は川へ押し流す」詩と、「息絶えもせぬに川へ押し入れる」史料との小さながいはあるが、同じ事件の情景にはちがいない。つまり、藤井逸郎は、この史料のこの場面を読んで、娘を殺す母親のころのなかを、みごとに詩として、腑分けして見せたのだ。わたしとしては、読む順番が逆だった、ということだ。

だが、この史料しか読んでいなかったなら、「飢餓」を自分の人生のテーマにしようとおもつたかどうか。シラミのわいた娘のあたまを、かゆいべかゆいべとかいてやる慈母の位相が、へにわかにか鬼になりかわる瞬間を、わたしも理解したい、とつよく思うようになったかどうか。へどつかどつかとどきがし、がさがさの手首わなふるえ、この母親のころの奥底を、追体験したいとおもつたかどうか。詩人のことばのちからがなければ、きつとこの「飢餓」というテーマの上を何も気がつかず、素通りしただけだったろう。

かゆいべかゆいべとかいてやる。  
気持ちよきそうな娘つこ見て、  
わたしはにわかにか鬼になりかわる。  
娘つこは怖がつて泣きさわぐ。

この餓鬼なんてそのように泣き騒ぐぞ。  
頭を石に押しつけて、もう一つ石をひつつかんで  
脳天めがけて打ちおろす。  
頭蓋砕かれてぐしゃりとなり、  
小さな手足が少しびくびくうごき。  
それみればなんで鬼でいられよか、  
心は慈母に立ちかえり、  
これで腹減つて泣くこともあんめえ、おれもあと  
から行くから  
許してけれ、許してけれと  
とりすがつて喚いてはみたが、  
他人に見られちゃただごでない。  
死屍は川へ押し流し、  
わたしはふらふら土手を行く。

この詩と出会い、この「死」と出会うことで、わたしのなかの何かが変わった、とおもう。「飢餓」との出会い。安サラーリマンの家に生まれたとはいへ、戦後生まれのわたしには「腹減つて泣く」経験がなかつた。

人が飢える、ということはどういうことなのか。飢えて死ぬ、ということはどういうことなのか。それは単に「はらがへつた」ということではないはずだ。「飢餓」とはどういうことなのか、「喰う」とはどういうことなのか。その本質に迫りたい、と思うようになったのだ。「飢餓」は、大げさに言えば、わたしの人生のテーマになつたのだ。

### ●天明の飢饉

では、詩のタイトルにもなつた「天明三卯年」とは、どんな年だったのか、どんな飢饉だったのか。歴史はいくつもの飢饉を記録しているが、なかでも天明の飢饉はすさまじいものであつた。それは天明三年（一七八三年）から五、六年にわたつて東北地方を襲つた大飢饉で、現代人のわれわれからすると想像を絶する惨状を引き起こしたのだ。

江戸天明期に日本各地をめぐる、それぞれの土地の地誌・風俗・見分を記録し『東西遊記』を著した紀行家で医者でもあつた人に、橘南溪という人がいる。その一節によると、

天明三卯の春奥州羽州大いに飢饉して、人、相食うに至れり。その頃京都にて南部津軽の困窮の沙汰おびただしく聞こえて人々聞き知れることなり。予が奥州に入りしは午年（注・天明六年）の春なれば、もはや国も豊かに食もたるべく思いしに、卯年の飢饉京都にて聞きしに百倍の事にして、人民大かた餓死し尽くして、南部津軽の荒涼なる、まことに目もあてられぬ事どもなり。

(「東西遊記」)

ということだったらしい。飢饉はもちろん、天候の不順、特に東北地方においては冷害による農作物の不作凶作から起るものであるが、近代農業技術や農薬などに頼るべくもなかつた当時は、壊滅的な被害を受けるのだ。

たとえば、同じ南部藩グループの八戸藩の場

合、石高二万石のうち、天明三年は一万九二五六十石（九六・三％）の損耗。翌四年は一万六五四七石（八二・三％）の損耗、と記録されているから、絶対量としての食糧が欠乏し、大飢饉になったのだ。その結果、天明五年五月の「御領分惣人数宗門改」（人口調査）では、八戸藩総人口六万五千人余のうち、三万一〇五人が「餓死病死」したとあるのだ。しかも、この数字にしても、

尤も宗門改めは五月より被仰月候にて、村の名主にて五月中吟味書上候後、五六月七月三ヶ月のうちに時行、多きれいにて死去候。もの幾千人やら、別て五六両月大きに人死御座候。是は已年宗門改に顕不申候

（「天明三癸卯ノ歳大凶作天明四辰ノ歳飢饉聞書」）

とあるから、飢饉のあとに伝染病が流行り、三万一〇五人の餓死・病死者のほかに、記録に残らない死者が数千人もあった、ということなのだ。実に総人口の半分以上が、飢饉のせいで死んだ。そして、飢饉は単に天候不順によるだけでなく、百姓たちを土地に縛りつけ、他国との交流を忌み嫌った封建制度と、都市部のもうけしか考えない悪徳商人たちによっても、被害は倍化されたのだ。

南部藩の歴史家・横川良介の『飢饉考』によれば、利にさとい盛岡の「小商人小賢しき者共」が、いち早く飢饉が来ることを察知して、農村部深く入りこみ、米穀はもちろん、食料になるものは干し葉まで、ふだんの五倍十倍の値で買いしめてしまう。また情けないことに、百姓たちも目の前の現金に弱くて、たくわえの糧食を売り払ってしまう。そ

の結果、

翌年（注・天明四年）に至って段々飢にのぞむと雖、金銭有りても五里十里の間に米一粒雑穀すべて食物となるべき品なくして、買ひ求むべき様なく、丈家は倉庫元敷術計尽きて牛馬鶏犬猫鼠迄も食ひ尽し、尚一命を保つべき様もなかりし

ことになり、ついに、

或は飢に疲れて自身我子を淵川へ沈め殺し或は自身を立て死し淵川に入水し、前に記せる如く路傍にすら餓死の骸骨散乱せし、況や山川溝溪に餓死せし者限りも有べからず、此兩年の餓死推はかり知ぬべし

（「飢饉考」）

と、史料は記録するのだ。

藤井逸郎が、早瀬川原で追体験し、詩に描いた子殺しの惨状が、実は早瀬川原だけでなく、東北のあちこちの地で、幾重となく、繰り返されていたのだ。

食料生産者としての農民が、その食料の決定的な欠乏ゆえに、飢えて死んでゆくのである。そして、さきの八戸藩の史料によれば、餓死したのは農民をはじめとする庶民層がほとんどで、藩主はじめ家老諸士は緊急に移入された他藩米によって、一人として餓死したものがない。単に、自然現象だけでなく、制度が絶望的に、農民をとらえて苦しめていた。

南部本藩では、南部氏が元和元年（一六一五）に

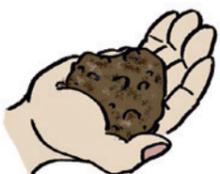
盛岡に入国して以来、約二三〇年間で約五〇回の凶作飢饉があった、と記録されている。平均すれば、四〇五年に一回は凶作や飢饉があったということだ。つまり、飢えが日常化していたということだ。襲ってくるかわからない飢饉に、常に人々はおびえていた。そういう暮らしが、人々のころのなかに「飢餓恐怖」を植えたのである。これは十分推測できる。生きながらえたいと懸命になって働いていた、数年に一度は、かならず飢えが農民を襲ったのだ。この天明の飢饉では、南部藩の総人口の四分の一、七万五一八〇人が死んだと史料は記録するのだ。

飢える、とは恐ろしいことである。「愛」とか「道徳」とか「絆」とか、そんなものがなんの重みももたない世界が現出する。ただ「喰いたい」という本能だけがそこにある。

「以来は喰いたい喰いたいと言わぬ故ゆるせゆるせ」と泣き叫ぶおさない子どもを、滅多打ちにして打ち殺す母親の心情は、現代人には、ほとんど想像を超えた世界だったろう。飢えのあまり、牛馬ばかりか、餓え死にした人の死肉を喰い、ついに生きた人間を殺して喰うものもあらわれる。おのれ人間であることの生を願うあまり、人間が「鬼」と化する逆説が、そこにはあった。そうやって「鬼」となって、生き残った農民たちは、おのれの内なる「鬼」をかかえながら、また「喰う」ために、苦しい生活を続けなければならなかったのだ。そして、飢餓は、また襲ってくるのであった。

### ●土を喰う老婆

以下は「飢餓恐怖」という視点から、『遠野物語』や、佐々木喜善の『聴耳草紙』の世界にふれることにしたい。



『遠野物語』は、すなおに読めば、人ではない異形の者たち―山男や山女、ザシキワラシ、河童、天狗、山の神、死人、幽霊―さらに、オオカミや猿、熊、キツネなどの動物、が活躍し跋扈する怪異譚集だ。初版序文にある「願はくはこれを語りて平地人をして戦慄せしめよ」という柳田國男の興味関心も、当初はそこに集中していた。のちのように、日本の「民俗学」を確立する、という意識はこの時の柳田には、薄かったとおもう。

だから、正統的な昔話集でも伝説集でもなく、『遠野物語』は怪異譚集、それも刊行された明治四十三年現在の「不思議ものがたり」集という性格のものになつていくようにおもう。だが、そのなかには、次のような、さりげなく「飢餓恐怖」や「他界恐怖」に触れられている話もあるのだ。

山口、飯豊、附馬牛の字荒川東禪寺および火渡、青笹の字中沢ならびに土淵村の字土淵に、ともにダンノハナといふ地名あり。その近傍にこれと相對して必ず蓮台野という地あり。昔は六十を超えたる老人はすべてこの蓮台野へ追ひやるの習ひありき。老人はいたづらに死んでしまふこともならぬゆゑに、日中は里へ下り農作して口を糊したり。そのためにも山口土淵辺にては朝に野らに出づるをハカダチといひ、夕方野らより帰ること

をハカアガリといふといへり。

（「遠野物語」一一一）

なぜ、「六十を超えたる老人がすべて蓮台野に追ひや」られたのか？この部分に、わたしの「飢餓」アンテナは反応する。深沢七郎の小説『檀山節考』が、六十になった老婆が山に捨てられる話だったのも、思い出す。

それは、貧しく食料に乏しいムラ（共同体）が生き残る智慧、もしくは捷、とでもいうべきものだったのではないか。今のように、コメがあままっている、賞味期限がきれた食べ物ほとんどん捨てられる、という時代ではない。とほしい食料を分け合つて暮らすしかなかった共同体にあっては、食料生産力こそ、人間の価値だった。

だから、体力がなくなり、労働力として共同体の期待を担えなくなった老人は、「飢餓恐怖」が生み出した掟にしたがって、ダンノハナもしくは蓮台野という「他界」へ追放されるしかなかったのだ。他界は死の世界。だからこそ、そこはハカ（墓）と認知されていたのだ。ハカに向かうからハカダチ、ハカから帰ってくるからハカアガリなのだ。

主役と監督は中央高級官僚の柳田國男、助演と協力者は田舎文学青年の佐々木喜善、という構図の『遠野物語』とちがって、『聴耳草紙』は、佐々木喜善がその晩年（昭和六年）、みずから主演を演じ監督プロデュースをした作品だ。質量ともに日本最高レベルの「本格昔話集」といってもよい作品だ。その『聴耳草紙』のなかにも、こんな話があった。

昔、野中に一軒の百姓家があった。その家には老母と息子がいて、息子は毎日外へ出て働いては老母を養っていた。ある年大阪に戦争があって、息子はそれに召し出されて行ったので、年寄一人が残ってしまった。息子は何年たっても還つて来なかった。村の人達も初めのうちは気にも止めずにいたが、何年たっても婆様が食物を求め風がないので、どうしていることかと思つて行つてみると、その老婆は土を喰つて生きていた。それで婆様の死んだ所へ御堂を建ててバクチと呼んで地神様に祀つた。現在も栗橋村宇太田林、前ヶ口の畠中の大きなモロノ樹の根下にその祠がある。

（「聴耳草紙」一二七番・土喰婆）

自分を養ってくれる労働力を失った老婆が、そのいくさに行つて戻らぬ息子を待ち続け、ついに飢えて土を喰うようになった瞬間、その老婆は、村落共同体から離反した「死」（他界）の世界の人へと変身したのだ。

その老婆の変身が、共同体内部に生きる人々の「飢餓恐怖」を戦慄せしめたからこそ、人々はその崇りを畏れて、老婆を「地神様」に祀つたのだ。

そしてもうひとつ、共同体にとって、老人と同じように生産力を持たない人間がいた。それは子ども（特に嬰兒）であった。たとえば『遠野物語拾遺』を見てみよう。

附馬牛の某といふ処に、掘返し婆様と呼ばれて居る老婆があった。この老婆は生まれた時に母親に戻しを食つて唐臼場に埋められたが、しばらくし

て土の中で細い手を動かしたので生き返ったと言っ  
て掘起して育てられた。それから掘返しと言ふ紳  
名が附いて、一生本名を呼ばれなかったさうであ  
る。縊られる時に一方の眼が潰れたので生涯メッコ  
の婆様であったが、十年程前に老齢の為に死んだ。

（「遠野物語拾遺」二四六）

これは、明らかに間引きを象徴する話である。  
「戻し」とは、生まれたばかりの赤子を、もとの世  
界に戻すこと。つまり殺すことだった。おそらく間  
引きは、姥捨てと同様、飢餓にたいする農民の日常  
的防衛行為であった。

慢性的な飢餓状況と、一生土地を離れることな  
く、ただただ働きつめて死んでいかなければならな  
い時代の制度の枠の中で、数年に一度はかならず周  
期的に襲ってくる凶作や飢饉に対して、村落共同体  
を守り続けるためには、間引きは、農民のやむを得  
ないぎりぎりの手段であったのだ。

村落共同体の利害が、個々の人間の心情や利害よ  
り先行する以上、労働力、生産力が人間の最高の価  
値基準とされ、それから外れてしまうものは、老人  
であれ嬰兒であれ、「口減らし」として切り捨てら  
れる、という非情な現実があったのだ。  
では、次の話はどうだろうか。

この地方ではよく子供に向って、おまへはふくべに  
はいつて背戸の川に流れて来た者だとか、瓢箪に  
はいつて浮いて居たのを拾って来て育てたのだと  
か、またはお前は瓢箪から生まれた者などと言ふ  
ことがある。

（「遠野物語拾遺」二二九）

はあった、とわたしは確信する。賢治自身は、近代  
に生を受け、一見ハイカラ好きの、裕福な商人の子  
弟だったわけだが、岩手の農民の中に連綿と続い  
てきた「飢餓恐怖」は、記憶の遺伝子として、賢治の  
中に色濃く残されていた、とおもう。そして、自分  
のなかの根っこにある「飢餓の記憶」を、賢治は根  
底から見つめたからこそ、それを核にしてみずから  
の作品として結晶させ、さらに貧しい農民たちのた  
めに「羅須地人協会」のような活動（たとえ、それ  
が途中挫折したにせよ）を起こしたようにおもえ  
る。

たとえば、「グスコープドリの伝記」には、こんな  
一節から始まる描写がある。

ところがどういふわけですか、その年は、お日  
さまが春から夏に白くて、いつもなら雪がとける  
間もなく、まつしろな花をつけるこぶしの樹もま  
るで咲かず、五月になってまたびたびた曇りがぐし  
ぐしや降り、七月の末になっても一向に暑さが来  
ないために去年播いた麦も粒の入らない白い穂し  
かできず、大抵の果物も花が咲いただけで落ちて  
しまったのです。

そしてたうたう秋になりましたが、やっぱり栗  
の木は青いからのいがばかりでしたし、みんな  
ふだんたべるいちばん大切なオリザといふ穀物  
も、一つふもできませんでした。野原ではもうひ  
どいさわぎになってしまひました。

この「グスコープドリの伝記」は、一見、モダンで  
ハイカラなイメージの作品だが、その内実は、冷害  
（つまり飢え）から人々を救うために、みずからは

結論を先に言えば、瓢箪は、水子（間引き）の象  
徴であった。生まれたばかりの赤子を、川に流して  
殺す。その水子の象徴として、瓢箪があった。「おま  
へは、もうすこしで水子にされたのかもしれないの  
だよ」と親が子どもに語ったという文脈で、右の話  
を理解すべきなのだ。その証拠には、次の発生因縁  
譚をお読みいただきたい。

ある所に、多勢のとも育てきれぬほどたくさ  
ん子供を持った親があった。後から後から順々  
に生まれるので、とうとう暮らしが立たなくな  
り、悪いことだとは思いつながら、遂に一番の末子  
を縊り殺して土中に埋めた。翌春になると、そ  
こから一本の見たことのない草が生え出した。  
それが成長して多くの不思議な実を結んだ。そ  
の実は、みな中ほどからくびれていた。その訳は  
縊り殺された児の体から生え出たものだからで  
あった。親はそれにフクベと名をつけて、町へ持  
って行って売って生計を立てた。それが千成瓢箪の  
始まりである。

（「聴耳草紙」一六番の一・瓢箪の始まり）

農民の空想力は、なんと悲しくもたくましいかと  
思う。瓢箪のくびれを、くびり殺した吾が児のその  
部分へと連想してしまう、農民の恨めしくもやさし  
い空想力がそこにはある。しかも、親は吾が児の生  
まれ代わりのそれを、町へ持って行って、売って生計  
を立てるのである。

だが、彼（彼女）はくびり殺した、吾が児の首の  
ぬくもりを忘れられたのだろうか。そうではある  
まい。くびり殺した児の肌のぬくもりの記憶を、負

犠牲になる、ひとりの若者の物語なのだ。

そして、これも読むのが逆になってしまうが、こ  
の賢治の描写は、「飢餓考」の以下の描写と、驚く  
ような相似性を示していた。

天明三癸卯年大飢饉（略）五月、田植時分に  
至て霜雨冷気にて重ね着用、田畑却て草生甚不  
諸人眉をひそむ。六月、土用中にも至て暑氣薄く  
たまたま日の光をみれば間もなく曇り、辰巳風丑  
寅の風或は北風にて浴衣用る日とは稀々にして  
日々雨天続、其上六月末より折々地震ひ風に連て  
砂をふらす。（略）七月、当月に至り頓て雨天  
続にて更に残暑なく秋涼弥増、稲の穂出るも有  
といえども多くは半日程にて曇り、又雨と成、晴  
雨更に定めならず。（略）これより已来別て秋  
冷強く二十日前後丑寅の風強く、四五日夜夜吹  
通し凡そ夏の初より九月末迄霜雨にて終に田畑実  
りなく大凶作と成。

（「飢餓考」）

賢治の中には、前近代の農民たちの持っていた飢  
餓恐怖を、自分のものとして感応するだけの内的必  
然があったのだ。「サムサノナツハオロオロアル」く  
しかなかった、みちのくの農民の記憶を、賢治も色  
濃くもつていた、ということだ。したがって、そのハ  
イカラぶりは賢治の表層的な仮面で、彼の奥深いと  
ころにあった本性は、すぐれて土俗的・共同体的想  
念に満ちていた、おもう。

その想念が、賢治という極めて優れたプリズムを  
通して、結実したのが賢治の作品群だったのではな  
いだろうか。

の記憶として一生抱え込みながら、それでも、人は  
日々喰って生きて行かねばならなかったのだ。  
かくして、さまざまな原民話を読めば読むほど、  
多くの民話の背景には、当時のひとびとの「飢餓恐  
怖」が通奏低音のように、隠されていることに、わ  
たしは気がつかないではいられなかったのだ。

### ●宮澤賢治のなかの 「飢餓の記憶」

佐々木喜善は、宮澤賢治とも  
交流があったことが知られてい  
る。賢治が民話的な作品「ざし  
き童子のはなし」を書いたのも、喜善の『ザシキワラ  
シの話』（大正九年）を読んだうえでの賢治なりの  
反応だったにちがいない。両者ともエスペランティスト  
で、お互い交流があったことは、賢治の残した喜善  
あての何通かの手紙に明らかだ。花巻でエスペラン  
ト講習会を開催するために、喜善は何度か（昭和三年、  
五年、七年）賢治を訪ねているし、賢治は賢治  
で、喜善を尊敬し、その発行する民俗雑誌の購読者  
にもなっている。同じ岩手出身で、十歳年上の文学上  
の先輩を（しかし、文学者としても実生活者として  
も不遇だった郷土の先輩を）賢治は敬愛していたに  
ちがいない。



ふたりの縁は、その後、昭和八年九月二日に賢  
治がなくなつてすぐ、八日後の九月二九日に喜善も  
流浪の地・仙台でなくなることからもうかがえるよ  
うにおもえる。

だから、そんな宮澤賢治のなかにも「飢餓恐怖」

### ●おわりに

史料を読み込めば、飢餓の惨状は、藤井逸郎の描  
いた早瀬川原の情景より、ずっと乾いていて、さら  
に残酷でリアルだ。親が子を殺して喰うまでにいた  
る、その実情は史料をとおして、今も伝わってくる  
が、ホラー小説のようにそのおどろおどろしさを紹  
介するのが、この稿の目的ではない。

ただ、『遠野物語』の遠景として、天明の飢餓を  
はじめとする近世の飢餓の記録が多々あり、その  
時代を生きた人々の「飢餓恐怖」が、たしかにあっ  
たのだ、ということは申し上げておきたかったの  
だ。

若いころ、わたしのなかに生まれた「飢餓」とい  
うテーマは、その後ずっと伏流して姿を消していた  
のだが、決して忘れ去られていたわけではなかつ  
た。三十年余のサラリーマン生活を捨てて、十数年  
前に「脱サラ」をしたわたしは、いま遠野のとなり  
の山あいのムラで、ちいさな百姓をしている。わた  
しのなかの「飢餓恐怖」にまっとうに向き合うに  
は、食べるものを自分で作る百姓になるのが、一番  
ふさわしい、と思ったのだ。

そして、百姓になった人生に、わたしはじゅうぶ  
ん満足している。

（二〇一七・五・一六 一四回目の田植えが済んだ日）

辻村さんは現在、農業に取り組んでいます。その  
活動は「やまねこムラだより」とネットで検索す  
ると、詳しく見ることができます。

## 世界子守唄紀行

鴉野 祐介

(立命館大学教授 日本子守唄協会評議員)

## 第21回 「アイスランドの子守唄」

今回は北欧の小さな島国アイスランドの子守唄をご紹介します。立命館大学で今年(二〇一八)四月から七月まで短期留学生として学んでいた二〇代の女性リサ・マーガレット・ジョンストンティアさんから六月に聞かせてもらった。

アイスランドは火山と温泉が多く、主産業は漁業・水産物加工工業で捕鯨も行われている。首都はレイキャビク、面積十萬三千平方キロメートル(北海道・八萬三千平方キロ)、人口約三十萬人(鳥取県、約五九萬人)。今年六月のワールドカップ・ロシア大会で、強豪アルゼンチンと一対一で引き分けて世界じゅうを熱狂させた。ノルウェーやデンマークなどスカンジナビア諸国との歴史的なつながりが深い一方で、アイスランドや英国スコットランドからの入植者もありケルト系文化の影響も見られる。中でも有名なのが、古ノルド語(古代アイスランド語)による作者不詳の散文物語「サガ」で、一二世紀から一三世紀ごろに書かれたとされる。内容は、歴代のノルウェー王の伝記、アイスランドへの植民とキリスト教化の歴史、島民のいさかいと裁判、古代ゲルマン民族の伝説など多岐にわたる。

今回リサさんが「アイスランドで一番有名な子守唄」と言って紹介してくれた「おやすみ 愛するわが子よ」も「サガ」にちなんだ唄だというが、詳しくは分らないそうだ。原詞はアイスランド語で、リサさんによる英訳を筆者が日本語に訳したものを紹介する。



アイスランド・風景

おやすみ 愛するわが子よ 外は雨音が叫んでいる  
ママが あなたの宝物の 古い骨と宝箱を守ってあげる  
この暗い夜 ずっと起きていてはいけない

暗闇はたくさんを知っている

私の心は重く沈んでいる

緑の草原が燃えて 黒い砂ができるのを

私は何度も見てきた

静かな水河の 深い裂け目の中で

ずっとおやすみ 静かにおやすみ

でも本当は 寝ないで起きているのが一番いい

さまざまな困難が やがて教えてくれるだろう

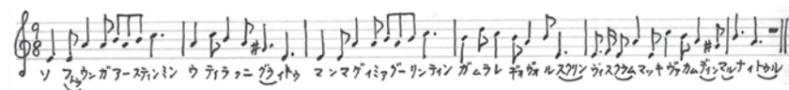
日が昇り 日が暮れる間に

人は愛し 失い 泣き 別れを惜しむことを

曲は古風な舞曲をイメージさせる八分の九拍子の陰りを帯びた旋律。以前紹介したフィンランドの子守唄にも似ており、共通のルーツを感じさせる。歌詞は意味不明な所が多いが、「暗闇」「深い裂け目」「困難」「別れ」など子守唄には似つかわしくない不吉なフレーズがいくつも登場し、いにしへの長大な物語世界が背後にあることがわかる。



リサさん



## 特別インタビュー 長田暁二先生に聞きました

## やがて音楽も正氣に戻り 本来の力を取り戻しますよ。

大衆音楽文化研究家 長田暁二さん

—— 美空ひばりが亡くなったとき、「ああ、これで昭和が終わった」と実感しました。時代の変わり目に、音楽も何か一つの区切りをつけているのではないのでしょうか。平成という時代の音楽の区切りは一体誰なのでしょう。また、平成の音楽とは何だったのでしょうか。

長田 平成を区切るとすれば安室奈美恵。沖繩という土壌に咲いて、唄という表現で平成を締めくくったという歌手です。美空ひばりが昭和なら安室はまさに平成を代表する歌手です。さっと引退したのも印象深いし、沖繩は戦後を引きずって今に至る日本の最大課題です。そこに残したものは大きく唄が時代性を持っています。

また作曲界として女性が活躍したのも平成という時代です。その中で宇多田ヒカルが傑出していきます。彼女の日本語に対しての感性は並ではありません。正確で表現豊かで、日本人の系譜を踏まえています。彼女は小さい時からアメリカの日本語学校に通い、日本の文化や日本語の意味やアクセントを忠実に学んでいます。アメリカナイズされている二人の音楽家の共通点は、外国の風を受けながら日本という系譜をしっかり踏まえている点です。安室はアメリカ的の力されているけれど、宇多田ヒカルというのはむしろアイルランドや明治の唱歌の色合いを持っています。その中にロックやポップスや多様なものをミックスして独自の音楽活動をしてきたのです。二人と

も平成に音楽を生んだ女性に間違いありません。

—— 昭和の音楽と平成の音楽はだいぶ違ってきましたね。

長田 昭和は藤山一郎やフランク永井といった歌唱力のある歌手によって個人がスターになっていく時代でしたが、平成はグループで歌いスターになっていった時代です。ジャニーズやAKB48などすべてグループで活躍しています。そのうえマリオネットが動くような踊りやダンスの体の動きが一緒についてきました。

—— まあ、私などは落ち着かないといえはおちつかないのですが

長田 機械や文明の進歩の影響が関係していることもあるでしょう。機械というのはやはり直線的で情感や情緒といったものを削り落します。運動的な踊りで左右への移動など、舞台や歌が虚を突くことはあっても心に残りません。ITに頼りすぎて、または技術に走りすぎるため心を忘れるということですね。機械に頼り過ぎると芸術性は後退するのは当然のことです。まあ、便利になりすぎれば要件は伝わるけれど気持ちは伝わりません。まして音楽は心を伝えるものなのですからね。

—— しかし、この文明の速度はどうしたことで

長田 新幹線の速度の速さに驚いていたら、それより早いモノレールができるとか、宇宙旅行が実現されるとか、昔手塚治虫の世界を空想世界と思っていたのが、あれよあれよという間に現実生活の中で実現されています。しかし、幸福感とは違うかもれませんね。

—— 次世紀の音楽はどこに行ってしまうのでしょうか

長田 心配はいらないでしょう。音楽というのは本来、心を休め気持ちをリフレッシュさせ、心豊かにしてくれるものなのです。今は正気ではないけれど、必ず回復してくるはずで。現にLPの流行や昔の蓄音機までが売れ始めています。生の演奏が盛り返し始めています。安らぐ優しいソフットがいかに大事か、気づき始めているようです。

平尾昌晃の音楽がね、若者に人気を博しています。日本人がモノや金や機械というものに浮かされてきた時代から、やはり正氣に戻ってくると私は信じているのです。音楽は人間から切っても切れません。人間はいつだってどんな時代でも、優しさや安らかさを求めているから音楽はなくなならないのです。

—— 子守唄もなくなってほしくない

長田 そうです。外国のモーツァルトやシューベルトなど子守唄という形式を使って歌曲として作曲したものの、また、日本の子守唄だって激しい機械音でやられたら子どもは安らかに眠れませんよ。世界の子守唄には心安らかにする、土の匂いのする優れた子守唄がたくさんあります。『子守唄』と名の付いていない子守唄の名曲もあるし、日本の子守唄も日本の音階とリズムの中でこれから披露していければ、子どもも心豊かな子に育つはずで。ぜひそれをも未

## 直島便り ⑦

## 豊かさって何だろう



南無庵 庵主 山根 光恵  
山口県長門市出身  
浄土真宗本願寺派 布教使

私は、今日も普通に目覚めた。

十一月も半ばだと言うのに、私の住んでいる瀬戸内は暖かい。寒くなると、目覚めた時、顔が冷たい。顔に冷たさを感じない時は「さあ！起きよう！」と布団からすっと出ることができる。そしてカーテンを開け、海の波の様子と、輝きにほっとして窓を開けて外の空気の味を感じる。遠くに見える島がくつきりと見える日は、空気が澄んでとてもさわやかな一日となる。そんな、なんでもない自然の様子に幸せを感じる。

東京で仕事をしていた時は、朝になると、まずその日にやらねばならぬことで頭の中はいっぱいになる。ただただがむしやりに、一日一日を過ごしていたような気がする。

しかし、直島での生活は、毎日同じことの繰り返して変化がないように思われるかもしれないが、そんなことはない。毎日と言うか、一瞬、一瞬微妙に違う。同じであることはない。草も昨日よりは成長しているし、昨日はつぼみであった

花が、今朝は開いていると言う変化も感じる。確かに、ここでは外を歩いても、おしゃれなブティックがあるわけでもなく、ウインドウショッピングなんてできるわけがない。だからといって島に住んでる人がダサイ人ばかりかと言うと、決してそんなことはない。皆、自分に合ったおしゃれをして楽しんでいるし、退屈している人は少ないように思う。

この頃、「豊かさ」って何だろうと？ 考えてしまふ。豊かさとは、例えばまず物がたくさんあることかもしれない。種類、量がたくさんあることは、なるほど豊かであると言える。

しかし、物があり過ぎて、余ったものが山積みになっていたら、それは豊かという感じはしない。自分が欲するものが常に身の回りにあつて、手に取ることができ、さらに心地よい温度で快適に過ごせたとしても、必ずしもそれだけで豊かとは単純に言えない気がする。それはなぜなのか？ 少し考えてみたい。

のではなく、費用を負担することによって、便益を自分が得ることの意味を理解してほしいと言うのである。そしてその利益は、ポブリカ保護基金に回され、地域に根差した持続可能な観光を目指しているとのことである。

日本でも最近、原発に頼らないエネルギー源として太陽光発電の設置が盛んである。

日本で太陽光発電といえば、家の屋根にパネルをつけて自宅で使う電気を賄い、さらに余った電気を売れるシステムができています。また、広い土地にパネルをたくさん並べている光景も思い浮かぶ。

自分の家の電気を自分で生み出すというのはとても良いことだと思う。しかし、余った電気を売って初期投資を償却するのであれば、最初からもっと小さいパネルにして足りない時が来た

数年前のことであるが、プータンに行ったことがある。プータンは「国民総生産（GNP）」に置き換え「国民総幸福量」（GNH）と言う独自の考え方を国家の指標として打ち出した国である。

そのプータン旅行の途中で、ポタン県のポブリカ谷というオグロ鶴の生息地にハイキングに行った。この地は、プータンで最も美しいとされている名所の一つでもある。そこは世界的に絶滅の危機にあるオグロ鶴の冬季生息地で、チベットから飛来してくる鶴を大切に保護している。



オグロ鶴

少し電気を買い足す程度でもよいのではないかな？ とも思う。

また、山の斜面にもすごい量のパネルが設置してあるのを見ると、広大な斜面に木が一本もなく、災害時に影響は出ないのかな？ と心配になることがある。

一人ひとりが無駄な電気を使わないようにして、なるべく自分のところで賄って、足りないところは買わせていただくということならば、みんなが利益を分け合えるのではなか？ これらはまったくの素人考えではあるけれど、そんなことを感じてしまふ。

ところで鶴と言えば、日本でも色々なところで鶴が飛来する土地がある。いつか、山口県の周南市の八代というナベツルの飛来地があり、ナベツルは絶滅危惧種であるため、地域の人たちが、力を合わせて保護をしている光景をテレビで見たことがある。

その番組で、鶴が飛来する時は必ず、地域の上空を三度回り降りてきて、帰る時も三度回ってから帰ると言うことが紹介されていた。地域の人達は、鶴は来る時は「よろしくお願ひします」と挨拶して、帰る時は「ありがとう」とお礼を言つて帰るのだと信じ、みんなで手を振って見送る様子が出ていた。

大人も子供も、昔から見ていた光景であるから何ら不思議とは思わず、鶴に手を振る。

その姿や心に、ポブリカ谷の人達の暮らしを見た時と同様に、私は「豊かさ」を感じるのである。

愛の木

鶴はとても賢い鳥と言われている、病気の鶴がいると、他の鶴が五日間かけてチベットからポブリカへ塩を運んで手当てするとも言われている。ポブリカ谷の人達は、何よりも鶴のことを大切に思っている。電線を張って電気を通すと、その電線で鶴が傷つくことがあってはいけないから自分たちに電気はいらないと、ずっと電気がない生活を送っていた。彼らは「電気があればよいけど無くても良い。それよりも、鶴が来ると幸せな気持ちになれる。子供の頃からずっと見てきた鳥だから」と言う。

そんな彼らが、電線を張らずに電気が使えるようにと、王様が各家に小さい太陽光の発電装置をつけて下さったそうである。その発電装置は、各家の屋根にちよんと乗った小さいもので、それで、照明、冷蔵庫、テレビくらいは賄えるようである。

その発電機の費用も無償ではなく、各家の負担であると言う。無償で得られる便益に依存す



経文旗

**REPORT** 2018年11月27日(火)  
(於)浅草橋区民会館からの報告

皆で考えよう  
やめよう虐待  
とめよう虐待

虐待された子どもの保護期間は18歳まで。それから社会へ出ていくのは多くの問題があります。保護期間を終えた子どもたちの応援を表明し、NPO法人夢の宝箱を立ち上げた土濃塚達也さん。



名古屋からお見えになった矢満田篤二先生。養子縁組で虐待死を無くすという活動をライフワークになさっています。



虐待が止まりません。

日常茶飯事に各地で起こる虐待は、増加の一方で、その内容も残忍極まりない傾向にあります。どうしたら減らすことができるか、なくすことができるか、社会全体、日本人全員、みんなが考える問題です。

当日、ドキュメント「葦牙 あしかび」が上映されました。児童養護施設の「みちのくみどり学園」は虐待で保護された子供たちが暮らしています。その日常を丹念に描き、子供たちの苦悩や悲しみが胸に迫る記録です。しかし、個人情報保護や映像権などが厳しくなった現在はなかなか上映も難しくなりました。虐待の本質と、その対処、そして子供たちの未来という勉強会ではということで上映が可能になりました。

お話は藤沢昇先生。社会福祉法人岩手愛児会会長、児童養護施設みちのくみどり学園前園長、なんとその半生が虐待防止への戦いの歴史でした。上映後「どうしたら虐待を止められるか、皆で考えよう」と称してジャーナリストの樋田敦子さんと西館好子を交えて鼎談しました。やはり、「虐待」というテーマでの動員は難しく苦戦しましたがご参加して下さった皆様は本当に熱心に意見交換してくださいました。一日も早く虐待という言葉が聞かれない世の中にしたいと願うばかりでした。



藤沢昇

- 一 1947年 生まれ
- 略 1971年 岩手大学教育学部卒業
- 歴 1999年 社会福祉法人まきば会理事
- 一 2006年 厚生労働大臣表彰
- 一 2010年 瑞宝単光章受賞



樋田敦子

- 一 東京都生まれ
- 略 明治大学卒業後新聞記者を経てフリーランスに
- 歴 女性と子供の問題、虐待や事件などの記事を雑誌に出筆
- 一 11月に「東大を出たあの子は幸せになったのか」を刊行

豊かさとは何だろう

日本子守唄協会 会長 西館 好子

昔がすべていいとは思わない。ふりかえっても、戦争の記憶や、物のない暮らしを経験した人なら、いまの暮らしはそんな心配をしないだけでもありがたい。

なのに今なぜか心に隙間風が吹くように体が寒くざわざわする。レストランや食堂で思い思いの食事をとり、パーティで御馳走を皿に受け、満腹と歓談を楽しんだ後の食べ物の残り、コップに干されることなく飲み残されたビールやワイン、悲しくなる瞬間だ。たべものもいきものならこれほどの無駄なごみは考えものだ。

そういえば、外の出されたごみ袋には大量の衣類や、まだ使える食器や電気製品が無造作に転がされている。

繁栄と文明の進歩は生活を根底から変えてしまい、恩恵を被った私たちにはありがたいことに違いないが、無駄使いは当たり前、手料理も家庭の味も遠のいてしまった。

家庭がそれぞれの癖や色を香りを持つ時代は今はなくなってしまったのかもしれない。生活の中にあつた「暮らし」という手作りの部分は不合理で利には沿わないものだという風潮が吹き荒れ始めている。

先日女性週刊誌で「なぜ、母親が赤ん坊を見なければいけないのか」「ミルクは赤ちゃんの万能栄養ではない」という記事を見た。時代が変われば人間も変わるでは済まされない。母親が子供にあげられる免疫はかけがえのないものだ。赤ちゃんは一挙に食事はできない。時代が変われば人間の構造までが進化するというのではないと教えてあげたかったし、本質が進化をするものでもない。疑問は残った。

目に見えるものの荒廃よりも心のありようの変化はもっと深刻かもしれない。電話もコンピューターも新聞も辞書も地図もあらゆる情報機能を持つ「スマホ」が日本どころかすべての人間が、子供から大人まで持ち使用するようになった。

人間関係や人のつながりが希薄になってきたのも機械に振り回される時間に余裕をなくしたという一因もあるかもしれない。

希薄に感じられないのは機械には、情報が、孤独感さえも取り除いてくれる、と錯覚してしまう「仮想人生」が作られているからだ。スマホがなくなったら、自分の存在と自分の世界が喪失してしまうと考えただけでも恐ろしい。このままいけば人は確実に心を失うのではないだろうか。

実際コンビニとスマホがなければ生きていけないという人が沢山いる。人と話すこともできない、言葉が出ない、怒れない、笑えないというのも深刻な悩みだ。「あなたは誰？ 私はなに？」と問われる時代がまさかこんなに早く来るなんて。ではどうしたらいいのか、答えがなかなか出ない。便利さや豊かさ、合理性が進めば進むほど人の心の入り込む余地は少なくなる。つまり人間が人間らしさを発揮することができにくくなるというのに、どう対処していったらいいのかを真剣に考えなくてはならない。

原点に戻ろう。人が自然の中の生物であるということを再確認しよう。あるがままの命の原点を今一度思い返してみる必要があるのでは……。

生きていてよかった、縁ある人と会えてよかった、人と分かち合える優しさを持ちたい。金や物が基準になる暮らしから早く脱却したい。



さらになお一層の深処に横わって居るよう  
に思われる。

昔も我々の祖先は盛んに腹を切りまた自  
害をしたが、彼らは確実に死後の生を意識  
した故に、これによって人間らしさを中止は  
しなかった。むしろ永世の名と誉のため  
に、かえって絶ち難きものを絶つ場合が多か  
つたのである。しかるにこの信仰のみは近世に  
入つて一変し、死が百事を解決するというこ  
とを、人も我も責任の全免と見たのである。  
刑罰の極度はこれであり、それを自ら甘受  
した以上は、何物の制裁もおよぶあたわず  
と解し、実際外間もまた著るしく批判の手  
をゆるめたのであった。法令の人類を改善し  
あたわざる弱点は、社会が自殺を寛容しま  
たはやや尊重する国において、まず暴露す  
るのが当然のことである。しかもこの気風に  
乗じて自殺の動機は日に退化し、単に道場  
に飢えまたは問責を恐るる者が、最後の勇

敢をもつて光無き国に飛込むに至った。しか  
もじよすべからざる自家どう着は、他の一方  
には旧式の家族私有観を保持し、我子の生  
命と未来とを第二の貴重品として、自由に  
処分し得るかの如く考えかつ実行したのであ  
る。生きて児を殺すことがすでに罪ならば、  
死に至つてそれが訴追せられぬのは法制の不  
備である。その平明の理もお解せられず、  
個人自由の主張ばかりが濫用せられるとす  
れば、世の無防禦無抵抗なる者の、惨酷に拘  
束せられるのは独り自殺者の幼児のみでは  
ないのである。

世のいわゆる同情にもとより責はある。  
たまたま倫常に反した事件の現るるごとに、  
俄然として錯かくしたちまちまた忘れ去る  
が如きは、軽薄であり不親切である。しか  
も手をこまねいて事態の横発に任せ、徒らに  
世道のたい靡を説くが如きは、断じて文教の  
責にある者に期待する所ではない。仮にま  
だ効果の多少を論ずるあたわずとしても、  
少なくともこの国家の異変に対して、意見無  
し方策無しというあたわざる者が居るので  
ある。しこうして国民は熱心にこれを議す  
べきである。万一にも罪なき者の殺りくが、  
今後も自在に行われ得べしとする者が政府  
ならば、彼らはすなわち信頼すべからざる  
政治家である。

「東京朝日新聞」論説、昭和2年10月12日、東京朝日新聞社

## 幼児の災害

柳田 國男

親が子を殺してから自殺するという悪風  
が、悲しむべき一時代の病的現象であるか、  
ないしは国民の氣質の不幸なる現われであ  
るかの問題は、むしろ談理の徒に一任してお  
くもよからう。とにかくに最近における同  
種事例の頻々たる統発に至つては、黙として  
その結果について長大息すべく、余りにも残  
忍でありまた奇怪である。これに対して当  
路要人の用意と公安との有無を、究迫すべき  
理由は十分である。すべての人類群のあらゆる  
文化の階段を通じて、これほど乱暴なる  
生命無視、これほど抵抗のない殺りくが、何  
らの制御なしにくり返されて居た場合があ  
らうか。吾人の昭代の隆昌に向かつて同心に  
期待したところは、要するに親が子を殺さ  
ねばならぬような、怖るべき事態を絶滅す  
ることではなかつたか。これをしも日常普通  
の出来事と看過して、別に何様の尺度の天下  
泰平を測定すべきものがあるか。

親子心中の名はすてに大いに誤つて居る。  
自殺自由の論の当否とは独立して、これは眼  
前の徴々たる行為にすらも、責任を負い左  
右を判定するの力無き者である。しかもい  
かなる場合に於つても、甘心して死を択んだ  
者ではないのである。避け得べくんば必ず逃  
れ走つたであろうが、親を信じて完全に欺か  
れ、もしくは無心にして防衛の途を解しな

かつたのである。かくの如き赤子が相次で命  
を奪われ、何人に向かつても永くその罪を訴  
うるあたわず、世間はたちまちにしてこれ  
を忘却し去るとすれば、同報告をなし社会  
相よるの実はもうないのである。なるほど  
彼らの将来は心細きものであり、あるいはそ  
の親の憂えた如く、孤児の悲痛なる徒勞を  
もつて一生を終わつたかも知らぬ。しかし少  
なくともその運勢は未知数であり、また普  
通健全の父母は、我子のためには十二分の楽  
観をさえなし得たのである。人が死に臨ん  
で心乱れ、卒如としてその希望を割引し放  
棄する機能はないわけである。

骨肉隣保の相互扶助は、かつては我国にお  
いては極端に行届き、今はまた急激にその  
保障を緩にしたことも事実である。ゆえに  
童児の一身を託して、ほぼその声明を全う  
するの途あることを知つたならば、罪も無い  
二葉の芽を摘んでめい途の道づれにはしな  
かつたろうとも考えられる。その方法はい  
かにも具わつて居ない。親があつてさえ貧家  
の子は悩んで居る。もしも彼らの少なくとも  
も大部分が、各長養の機会を得て、天分を  
發揮し得るの見込みが立つたならば、ある  
いは最初からそんな無謀なる処置を考えなかつ  
たかも知れぬ。故にその手段も大いに試み  
るがよいと思うが、この悲惨事の真原因は

### すごい本みつけた

#### 徳川家康公靈言 光を、なげかける

混迷の今によみがえる 徳川幕府二六〇余年の英知

家康と子育ての話は有名だが、丹念な取材から家康の人物像とその生涯から今生きる現代人に何が必要か、を紡ぎだしている。その慧眼と仏心からでた多くの教え、人として大切なものを見逃しかけていた私たちに、ぐさりと突き刺さるものがある。

久保山雅文 著  
(ヒカルランド刊)



## 豊さについて

日本子守唄協会 理事長 井上 麻矢

最近自分の家の居間に神棚を作り、そこで祈る時間を大切にしている。

娘たちがすっかり大きくなり、息子のように大切にしていた老犬があつた世に逝ってしまい、自分を守ろうとしていたものが大きく変化していくことを痛感して、自分に何が出来るだろうかと考えての決断、それが自分にとっては「神棚を作る」ということだったのである。もちろん作るだけではない。そこに神様をお迎えし、その隣に先祖代々の御霊様たちの居場所を作った。お位牌も新しく作って頂いた。この神棚を作ってからというもの、祈りとは何かと真剣に考えていく過程で、どんな風に祈るのが一番自分にとってしっくりくるのかを探求するため、ずいぶん長い時間がかかった。祈るということにどれくらい力があるのか…と人にはよく問われるのだが、祈りというのは大きな力で私たちを守ることを私自身は信じて疑うことはない。この祈りでどれだけの困難を乗り越えてきたか、ここには書ききれないくらいである。いつかそれはお話するとして…。毎日神棚の掃除をして祝詞をあげてから外にでる。時間がない時は夜にゆっくりと祈る。お神やお神酒、そして塩とお米などを揃えていくうちに、なんと心が平穏になっていくか。この感覚こそ真の豊かさだと思えるひとときである。幼い頃からご先祖様という響きにとっても馴染みがあった。私の家は作家の家だったので親は二人共仕事中心で働き蟻のように働いていた。私の面倒を見てくれたのは母方の祖父母であった。祖父母は生活というのを丁寧に送っていたように記憶している。夏の朝は麦茶を大鍋で煮ている香りで目が覚めた。冬は私たちが寒くないように部屋を暖かくしてくれていたものだし、火鉢にあたりながら鉄の薬缶でお茶を入れてくれたものだ。春には庭一杯に丹精込めた花が咲き乱れ、秋はマツタケの土瓶蒸しなど季節のもので食卓はいつだって溢れていたのだ。なんと豊かな生活だったろう。

幼い頃の記憶というのは宝物だ。その時の記憶だけで生きていくことも出来る。そして体験した中で次の世代に伝えていくことの大切さを思う。特にご先祖様の事を思うとき、自分には4人の大切な祖父母がいると思うだけで胸の奥が熱くなる。面倒を見てくれた祖父母の顔、そして私がこの世に生まれる前に亡くなってしまった父方の祖父、最後まで勝手気ままに生きて父方の祖母。いつの日かあの世でお会いしましょうねと心の中で声をかける。九年前にこの世を去った父とも心で会話する。この記憶の貯金が

子供の時に与えられている子供は幸せである。そんな当たり前のことですら今は難しいというのだから、なんと寂しい時代になったのであろうか。いくら携帯電話が普及してロボットが人の代わりに働き、紙幣や硬貨のお金がなくても、ピッとすれば物が買えるような便利な世の中になったところでそんなのは豊かのうちに入ることはない。豊さというのは五感を満たすことを言うのだから機械では決してそれを得ることはできないのである。

そんな体験を子供たちにぜひ与えてあげたい。それすら出来ないこの国はどうなってしまうのだろう。考えていると又落ち込みそうだからすぐに祈ることを繰り返す。不安になったら祈る。絶対に叶うと信じて祈るだけだ。神棚に見守られている生活をするようになって、私は改めて目に見えないものへの畏敬を深く感じるようになった。大好きな童話の「星の王子様」のように大切なものは目に見えないし、大切なものは失ってからわかることがあると痛感している。

祈ってばかりいる私を見て娘たちはからかうのだが、こちらはそんなことには動じない。疲れてお祈りの時間が少ないと最近では「手抜きをしている」と揶揄される。とても幸せな時間である。しかしこんな時間はあともう少しで終わる。なぜなら上の娘はまもなく嫁いでいくからだ。先日母を伴ってウェディングドレスの試着会があり出かけてきた。親子三代の試着会は本当に楽しい。母は決断が速いので、これはいい、これはダメとアドバイスをすると上の娘はそれに従う。なぜ従うのかはわからないが幼い頃からおばあちゃん子だった二人の娘は母の決断力をどこかずっと信じているみたいだ。「私ぐらいはウェディングドレス姿を好みババに見せてあげなくちゃ、冥途の土産にね」と上の娘が言えば、「メイドの土産??」ととんちんかんに受け取って困った顔をする下の娘を見るたびにおかしくなる。どうやらメイド姿の好みババの姿を想像しているらしい。語学は得意だが、決定的に日本語の語彙が少ないらしい。豊さとは一体何と問う時代において、変化することを恐れずに前に進むことを新しい年の目標としようと思う。家族のかたちが変わっても変わることが世の常、当たり前。そんな風に年を重ねていきたいと思う今日この頃だ。

いつか「あの時、こうだったよね」と語れる思い出を娘たちに伝える仕事が、私には最も素敵なののように思える。そしてその思い出こそが、母親である私が娘にあげられる唯一のプレゼントなのだ。

## 過ぎたるはなお 及ばざるがごとし

日本子守唄協会 会長 西館 好子

この格言は人間の値打ちを量より質だと教えているものですが、あえて豊かすぎる現代は貧しさと同意語ではないか、に当てはめてみました。新年早々「飢餓」などという忌まわしい言葉で始めなくとも子守唄協会の中でもそんな意見が出されました。しかし、どうでしょう、地球環境がかわり、大切な食も危ない時代が早晩くるかもしれません。となれば、人間の心も生活も「飽食」や「豊かさ」で飾ることなどできなくなるでしょう。

数年続けて行っていたインドのガンジス川は4年前には本当に汚い不衛生な川でした。私たちに伝聞されていた通り、死体の流れ、水は濁り、土の匂いと汚物の匂いに満ちていました。しかし、それから二年、ガンジスの水はうっすらと底が見えるほどにきれいになっていました。沐浴をしても少しも汚いと思わないほどになっていったのです。なぜならば源流であるヒマラヤの氷河が恐ろしい勢いで溶けだしているからでした。自然破壊の波は文明の速度に比例して私たちを脅威に睨め始めているのです。

貧乏と不自由を知っている私たち世代はあまりの豊かさを甘受することはできないのです。そればかりか、いつまでもこんな時代は続かないし、地球は残っても人類は滅亡するのではないだろうか、という不安のほう日々大きくなっていくように思います。

「思いあがつてはいけませんよ」

という声をいつも耳元で聞いています。豊かになったといつて、心に、気持ちに、人間に、豊かさを優しさで満たしているのだろうか、かけがえのない肉親さえも無残に殺し、日々わけのわからない理由で犯罪や弱者への虐待がはびこる世の中、詐欺や自殺が蔓延し、人間より機械が幅を利かせ、一体あなたは人間？と問いかけたい衝動に駆られることも再三あります。分け与えることや哀しさを共有することもない人間関係が果たして豊かさと呼べるのだろうか、人間が人間でなくては伝えられない、できないことを後世に丁寧に残せないだろうか、本当に考えてしまいます。

あえて極限にある「飢饉」という現実があった時代を知ってほしい。これは遠い昔のことではなく、日本の近未来に起こる予知ではないか、という思いがしてならないのです。貧しさという罪から解放された喜びの、そのわずかでも生き物の「分」身の丈の謙虚さを今持たない限り、私たちに本当の豊かさはやってこないという思いです。辻村博夫さんの「飢餓の記録」を読んで、「遠野の文化賞」の選考委員だった私は衝撃を受けて絶句しました。眠れないほどかんがえてしまいました。

まず、みんなに知ってほしい。それから考えてほしい。自分の足元を。本当の豊かさを見つける今年にしてほしい、そんな気持ちであえて「豊かさとは」を特集してみました。



左 根津正明さん

## やっちゃんば“食育”出前講座

東京の台所「太田市場」で長いこと青果業をなさっていた根津正明さんは今、子供たちが野菜や果物を食べなくなったことをとても危惧しています。健康への影響や、切れやすくなった子供たち、成人病も脳への影響までも始めているのです。長い経験から食の話を子供たちへ伝える行脚を始めました。実際に取り立てのくだものを食べてもらい、その大切さや効能を伝えているのです。

「やっちゃんば食育出前講座」です。足立区北鹿浜小学校五年生の授業の感想文です。根津さんは今も野菜と果物をもって子供たちのもとを訪ねる仕事をしています。興味のある学校や各地の皆様も申し込んでみてください。

【申込先】根津正明 携帯電話 090-4071-5139



### 「学んだ授業」 岸菜々美

お話を聞いてわかったことがいっぱいありました。一つ目は果物にはすごく栄養があるということです。二つ目は戦争があったときは肉がぜんぜんなく一年に一度だけしか、しかも今ではめったに食べることもないさきさきの肉を食べていたということです。果物を食べた感想はこんなに種類をいっくにたべたことはなかったの、おいしく楽しかったです。

### 「お話を聞いて」 中路花緒

学校の帰り落ちていた柿を食べていたのにびっくり。糖尿病も血えきがドロドロになってしまうのだということがよくわかりました。私はどちらかといえば好きなのでこれからもやさいを食べ続けたいと思います。

### 「野菜のことを知って」 葛西駆流

最初に驚いたことは果物の、約九十パーセントが水でできていることです。人間の体は約七十パーセントだときいたことがありますが。

### 「ためになった授業」 岡田来人

戦争の後にはアメリカから肉がゆ入れされて日本の糖尿病の人がほとんどいなかったのにすごく増えて今は一千万人ときいたときはびっくりしました。果物を食べたときは最初にミカンを食べたときは甘くて本当においしかったです。

### 「今日の授業で学んだこと」 本間すみれ

生のとうもろこしは初めて食べました。あんなにプリプリして、ゆでてあるほうがあまいかなあ、と思いました。果物もトウモロコシもおいしくて、おなかいっぱいになりました。

### 「たのしかつた授業」 大石梨々子

野菜の選び方がよくわかりました。キャベツの選び方、レタスの選び方がわかりすごくウキウキして、かえったらさっそくお母さんに教えようと思いました。

## 「おたより」

〜子守唄協会を温かく見守ってください〜  
皆さまからの素敵なおたよりをご紹介します

### ●本の紹介

国見修二さま (詩人・妙高市)

晩秋の味わいです。お元気で活躍のことと思います。詩集「母は焚き木です」が出版の運びとなりました。詩集は一月末に完成予定です。出版社は松永伍一先生の「賛歌美に殉じる人々」の冷風書房です。



### ●永瀬嘉平さま (作家)

西館好子様

27日、虐待の講演と映画、素晴らしかったです。さて、虐待問題。ますます増えると思います。多分解決策

はないかと存じます。

あの岩手の施設にしても親が来ることもなく子供の3才4才のころに預けられたら、親のぬくもりを覚えてはいませんので18才になるまでここに居るわけです。今回は施設を改良しようとしています。やがてそれぞれが個室を持つようになれば親は安心して別に自分たちの世界を築いて、子供のことなど眼中になくなるでしょう。

また、歩いていたら「子ども食堂」なるラーメン屋さんがありました。看板を見ますと「小学生はなにを食べても無料」とありました。多分親に連れられてくるのでしょうが、親だけの分はお金を払うというのでは果たしてラーメン屋はやっていけるのでしょうか。これは明らかに「育食」放棄ではないかと思ってしまうます。たとえ貧しい食事でも母親が作らなければいけないのでは。私な

ど戦後の貧しい時に育ちましたが、二人の兄弟のために、母はたべるものもほとんどにして子供たちのためにせつせと食事を作ってくれました。願わくば岩手の施設のようなもの、子ども食堂もないのが理想なのだとしみじみ思いました。

話はとびますが、カンボジアには五回ほど訪ねていますが、おそらく世界中で一番目がかがやいているのがこの国の幼い子供たちだと思えます。街を離れば、電気も水道もガスもない掘立小屋で生活しています。どこかへ子どもたちが生き生きしています。

ある時日本から持ってきたキャラクターを5〜6才の女の子に3つ上げました。女の子はすぐに駆け出して弟や妹につすつ分け与えています。結局自分のものはなくなりました。まい彼女はチョコレート色の川の中に泳ぎに行きました。女の子は遠いところに水くみ、毎日の薪拾い、小魚とりに明け暮れるとのことでした。見虐待のように見えますが、これは大人になれば、自立、自活につながると思います。

何が狂い始めているのはこの国の少子化問題が表面化して初めて、

### ●椎野文字さま (作家)

からのお便り

ららばいにいろいろあらわれて本は読まれません。大人が読まないのだから子供が読まないのは当然です。

昔は本屋が街に何件かありました。学校の近くには文房具屋さん和本屋さんがありました。駅にもありました。今はありません。日本子守唄協会のある浅草橋には今本屋さんは一軒もありません。

ららばい通信をみるとび思いがっぱい詰まっている活字をいとおしくながめています。是非に長く続けてくださいね。

皆さまからのおたよりを  
お待ちしております。



掲載の可否をお書き添えくださいませ

ふれあいファミリーコンサート  
～東北の子守唄と童謡・唱歌～

開催日：平成30年8月25日(土)  
主 催：国立青少年教育振興機構  
会 場：弘前文化センターホール

リンゴの故郷弘前、遠くにうつつすと岩木山が望める文化会館にて。リンボーカルテットの演奏者たちの衣装がきれい、まず子どもたちの目がかがやきました。リンゴの歌から入り、稲村なお子さんのリードで歌って遊んで、最後はみんなで舞台上がって、合唱。

こんなことはしたくてもできないという体験を子どもたちに体験してもらい、記憶にとどめる思い出づくりを夏の一日にしてみました。歌を生で聞くということが子どもたちにとっても珍しいことです。いい記念になってほしいと思います。



ふれあいファミリーコンサート  
～京都のわらべ唄と童謡・唱歌～

開催日：平成30年9月8日(土)  
主 催：国立青少年教育振興機構  
会 場：京都市立京都堀川音楽高等学校 音楽ホール

何年か続いている京都は申し込みがいっぱいでお断りしなければいけないのが心苦しい限りでした。もちろん満員もあって盛り上がりがありました。

当日のアンケートより

○子守唄を歌う母親がおられたらどんなにいいでしょう。

○たのしい子育てしたい(これって6才の子の感想なんです)ですが、すごいですね。6才で子育て考えているなんて)

○大勢の子どもたちが楽しそうでした。素直に育ってほしいと思いました。

○夜泣きで大変だったのにゆりかこの歌をよく歌っていた。今日聞いて思い出しました

○歌だけではなく手遊びをしてくれたり子ども目の線になっての楽しさをとてもよかったです。



ふれあいファミリーコンサート  
～北海道やアイヌの子守唄と童謡・唱歌～

開催日：平成30年10月13日(土)  
主 催：国立青少年教育振興機構  
会 場：ザ・ルーテルホール

残念ながら動員数が少なく、来たお客様からこんなにいいコンサートなのにもったいないわね、と同情されてしまいました。申し込みが120名くらいあったはずなのに、これはどうしたことかしら。

10月の北海道、歌は北海道にまつわるものが多く、アイヌの子守唄は、原語ですから本当に珍しいかなと思います。こんなとき子どもがどんなに救いになるか、ふとそう思いました。

動員はしっかり細心の注意をしてやるうと決めました。



親子でやさしい子守唄コンサート

開催日：平成30年10月17日(水)  
主 催：NPO法人日本子守唄協会、福島県立博物館  
会 場：福島県立博物館 講堂

これはもう、なんともホンワカ、子どもたちの祭典。あちこちから幼稚園児がやってきました。

お話はただの朗読ではなく、歌を入れて語る「浦島太郎」「桃太郎」。知っているようで知らないお話にきらきら目を輝かせて聞き入っていました。場所は博物館、静かな空間に子どもたちの声がかましました。何しろ舞台上で西山琴恵さんが歌うと、みんな一斉にうたいたいです。こちらがすっかり平和な気分になり、つい笑いがこぼれました。終わっても子どもたちはなかなか帰るうとしません。

ピアノの逸見良三さんは「あんたピアノが上手いね」といわれてぎゃふん。会長の西館好子さんは「年いくつ?」と聞かれ「78才」と答えたら、「フーン若いね、70歳くらいかと思った」、あんまり変わらないようにだけと実感は子どもにないのかも。苦笑いしていました。

出演者にとっても楽しい一日でした。福島博物館の江川さん、いろいろの本当にありがとうございました。



○最後に子どもをステージに立たせてくださって嬉しそうなお姿を見られてとてもよかったです。  
○初めての参加。思い出すことばかり。  
○4才の子どもが嬉しそうに手遊び。今日からまた優しい気持ちで子どもと向かい合っていきたいと思っています

スミセイキッズフォーラム ～親子の絆の子守唄～

開催日：平成30年9月30日(日)  
主 催：公益財団法人住友生命健康財団  
会 場：ティアアラこうとう 大ホール

何度となく観客の皆さんからリクエストしていただいた古謝美佐子さんの出演。相変わらずの美しい長い髪。ファンが本当に多いんですね。独特の沖縄の子守唄。子どもも大人も楽しめたイベント、会場は超満員でした。台風も速度を遅くしてくれたのか、開演から終演まで雨もなく、空はどんより曇っていました。

川口京子さん、稲村なお子さんは、お得意の童謡唱歌を熱唱、会場をわかせました。本当に歌という癒しと開放感をしみじみ味わうという時間はどんなに大切か。会場を駆け回り回っている子どもたちも一瞬そこで立ち止まって舞台にくぎ付けというの、心にひびくものがあるからでしょう。夜は大雨になりました。



願海庵まつり

開催日：平成30年10月7日(日)  
主 催：願海庵  
会 場：岩手県一戸市 願海庵 本堂

岩手県一戸市願海庵の本堂にて井上麻矢理事長と、作家の青木新門先生が講演を行いました。当日は「願海庵まつり」と称して境内で射的や投げ輪、食べものやフリーマーケットなどの出店が並び、多くの人で賑わっていました。講演が始まると一斉に本堂に集まっていたためか一気に境内が静かになりました。

井上麻矢理事長は日本子守唄協会について、青木新門先生には生と死についてお話しいただきました。メモを取る方やジツと正座して聞き入る方など、みなさま講演に没頭していただいたようです。



ふれあいファミリーコンサート  
～世界の子ども守唄と童謡・唱歌～

開催日：平成30年10月31日(水)  
主 催：国立青少年教育振興機構  
会 場：阿倍野区民センター 小ホール

大阪は子どもたちの歌があちらこちらから聞かれる和気あいあいの会場で幕開けしました。稲村なお子さん、西山琴恵さん、雨宮知子さん、リンボーカルテットの皆さんとにぎやかなさるい踏み。息の合ったところを見せてくれました。お母さんをテーマにしてみました。

動物のシリーズ、お遊びのシリーズ、お誕生日で参加のシーン、どれにも子どもたちの声がかさなります。一体感というのは平和な感じを倍加させます。幼稚園の園児さんたちの行儀のいいこと、音楽教育を率先してやっている園の情操教育が徹底しているのがよくわかりました。



ふれあいファミリーコンサート  
～世界の子ども守唄と童謡・唱歌～

開催日：平成30年11月4日(日)  
主 催：国立青少年教育振興機構  
会 場：国立中央青少年交流の家 講堂

私たちのイベントでこんなにさみしく感じられたのは初めて、ちょっと落ち込みました。会場の外は12,000名の方が訪れていたのですが、なかなか子が子守唄フェスタに向いてくれません。国の施設の御殿場はとて広くまた複雑なつくりをしていること、わかりにくかったのが原因かもしれません。これは反省しきり、今後の課題となりそうです。



ふれあいファミリーコンサート

開催日：平成30年11月17日(土)  
主 催：国立青少年教育振興機構  
会 場：国立三瓶青少年交流の家 講堂

素晴らしい会ができました。職員のみなさまが手作りでの会場づくり。舞台、入口、どこまでも暖かな心に満ち溢れていました。子どもたちと宿泊していた留学生の皆さん。中国、ベトナム、の若い方たちの参加があり、国際交流が行われました。



## 活動予定

お問い合わせやお申し込みは、メールまたはFAXで  
日本子守唄協会までご連絡ください。  
Eメール: info@komoruta.jp FAX: 03-3861-9418

### 唄い継ごう子守唄・童謡・唱歌

開催日: 平成31年1月15日(火)、2月19日(火)  
主催: NPO法人日本子守唄協会  
会場: 浅草橋区民館(東京都台東区)

### 子守唄コンサート

開催日: 平成31年1月12日(土)  
主催: 岩手愛児会  
会場: みちのくみどり学園(岩手県盛岡市)

### つがるじよっぱり子守唄

開催日: 平成31年2月12日(火)  
主催: NPO法人日本子守唄協会  
会場: 内幸町ホール(東京都千代田区)

### 西和賀こもりうたコンサート

開催日: 平成31年2月予定  
主催: NPO法人輝けいのちネットワーク  
会場: 西和賀町文化創造館 銀河ホール(岩手県和賀郡西和賀町)

### とやま子守唄フェスタ

開催日: 平成31年3月3日(日)  
主催: 富山新聞社  
会場: 富山国際会議場(富山県富山市)

### ふるさとの空に唄おう

開催日: 平成31年3月予定  
主催: NPO法人日本子守唄協会  
会場: 大島文化センター(山口県大島郡周防大島)

色とりどりに飾られた風船をいじる子、その風船を片手に場内を駆け巡る子、みんなが一体となって合唱しました。川口京子さんが、面白くアレンジした「やぎさん郵便」や「犬のおまわりさん」などをおかしく歌うと皆大喜び。さすがに子守歌ではみんなお母さんの膝の上で寝てしまいました。稲村さんの歌には飛び起きてしまいました。留学生たちはみんな稲村さんの手話に合わせて「夕焼け小焼け」をしていました。終演後も「手話教えて」と何度も声がもたれていました。

三瓶の宮本所長、そして刈谷さん、暖かな会場を本当にありがとうございました。



雄大な岩手山を望む交流の家は壁に活動の写真が展示され、ここがどれほどみんなに愛されているかわかります。ちょうど「なまはげ」が文化遺産になったばかり、廊下に全国のお面の展示があり、なまはげを見つけたときは思わずシャッターを押してしまいました。当日は雪が降り、あたりは真っ白になり、冬の色を濃くしました。

「北風小僧の勤太郎」から幕開けしました。赤ちゃん連れのご夫婦、小学生、おじいちゃんおばあちゃん、宿泊している学生さん、養護施設の子供たち、が集まり、歌を聴き、一緒に手話をやり、最後は合唱と、子供と老人、知らない人同士が和気あいあいと一緒に楽しい時間を過ごしました。交流はまず人から、ゆったりとした自然の中でみんなが一つのことに向かい合うことの意味をしみじみ感じました。職員の皆様の心尽くしの数々、子供たちの宝物になると思います。

### ふれあいファミリーコンサート

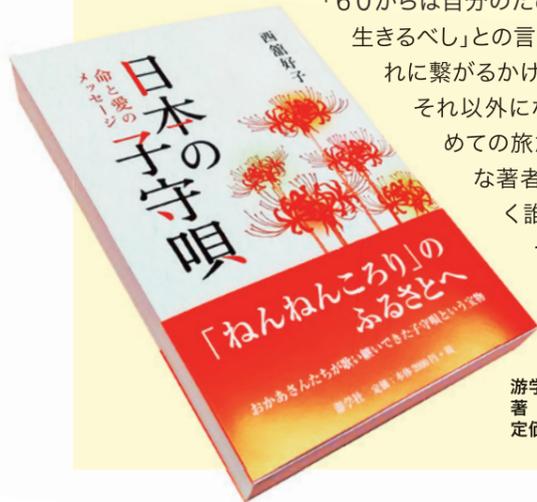
〜関東の子守唄と童謡・唱歌と読み聞かせ〜  
開催日: 平成30年12月13日(木)  
主催: 国立青少年教育振興機構  
会場: 白梅学園大学 講堂

白梅学園幼稚園のかわいい園児たち、保護者、白梅学園保育科の学生さんなどの前で、実は寒さと闘いながら、きれいなドレスで出演者の皆さん大活躍。いつに変わらぬ子供たちの元気はパワー満開に圧倒されました。



## 「日本の子守唄」発刊のご案内

22年前、日本各地に埋もれているであろう子守唄を求め、六十の還暦を前にした著者は旅に出た。それまでの人生を無我夢中で生きてきた。その自負もあり、得たもの失ったものの帳尻は合っていると信じてはいたが、彼女の心は空虚だったに違いない。父親の「60からは自分のためではなく人のために生きるべし」との言葉と、三人の娘たち、それに繋がるかけがえのない孫の存在、それ以外になにもないと覚悟を決めての旅だった。この本は、そんな著者の想いの記録、おそらく誰もが持つ子守唄という名の心の原風景への旅の案内書である。



游学社  
著 西館好子  
定価 2000円+税

## 歴史の裏話

### 勝海舟の豪快さ

海舟には庶民性にまつわる逸話が多い幕臣時代、明治政府の参議に迎えられたころには多くの庶民との付き合いが多かった。同じ参議の三条太政大臣が見かねて「あなたは栄職にある身分の方だ。遊芸の師匠や庶民が出入りなさるのはいかがなものか」と忠告をした。ところが海舟意にも介せず「今更長年の友を断絶するなどできるしない。私には遊芸師匠どころか、博徒もいれば、替間も茶屋の女中もいる。」と平然としていた。言葉もべらんめえ調で、命を惜しがることもなかったという。かつて坂本竜馬が海舟を殺そうと思って家を訪問したところ、その無防備さに圧倒されすっかり魅せられてしまったという逸話がある。

徳川家康は思慮深く画策家と称されているが、その基本は「碁」にあったという。駿府に隠居していた時も相変わらず年寄りを集めて碁を打っていた。庶民たちが勝負に熱中するあまり地金が出て、あれこれ雑談するのに耳を傾けていたということ。庶民に做ったともいわれている。

の声と生活の情報をキャッチするに長けていたのは、海舟の故智に做ったことだというわけだ。江戸城明け渡しに、西郷と肝胆相照らし、さらりと大事を決したのも格式やメンツに捉われず卓見した政治観とその庶民性にあったということのようだ。

### 仏陀の苦行

一粒のごまと一粒の米のほかは一切口にしないと食物を断つ、という修行「一麻一糸」の苦行に入った釈尊は、神はヨモギのようになり、目は落ちくぼみ、骨と皮、腹の皮と背の皮がくっつくようになってしまった。にもかかわらず一向に彼に悟りはやってこない。

その時ネランジャラー河の堤の上を民謡を歌って徹農夫の声が聞こえてきた。糸は強すぎると切れる。弱いと弱いでまた鳴らぬ。程よい調子に絞めて。上手にかきならすがよい。その時釈尊の心に靈感がひらめいた。彼はすっぱり修行をやめてその場を立ち退いた。

